

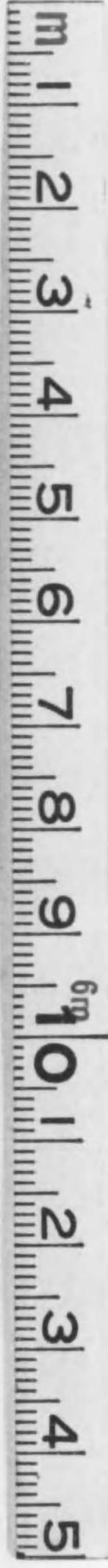
318-578



1200501374361

38

內叢書
一輯 莊內女流文集



始



輯一第書叢内莊

集文流女内莊

和田鶴岡高等女學校長序文
星川清民先生校閱

おそさくらの記

溫海の記

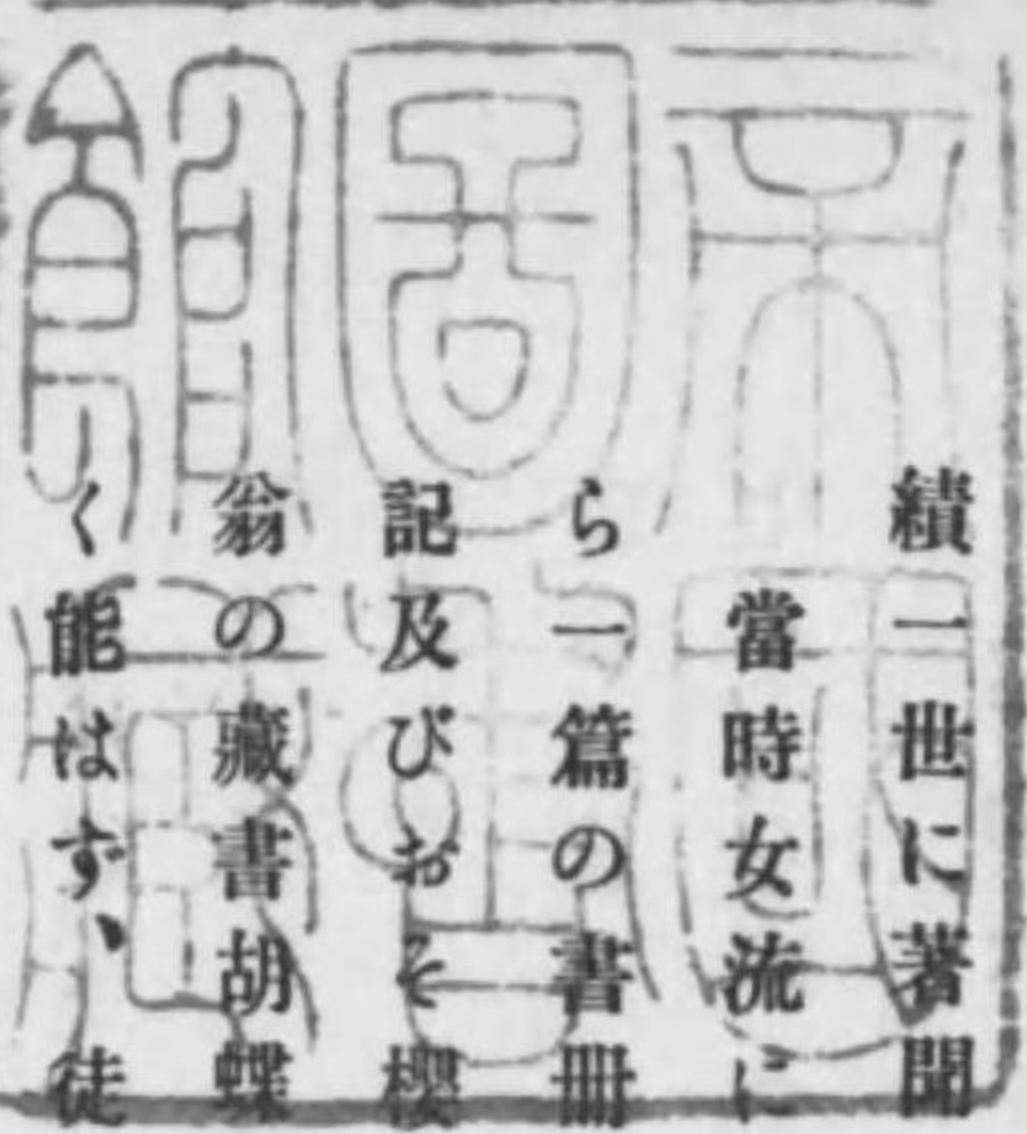
胡蝶日記

行發會研究料史内莊

序

發行所寄贈本

凡そ政綱の振張する所文教興り、文教盛にして人才顯はる。庄内藩賢君明主相次ぎ加ふるに輔弼の良臣あり、夙に政教を振興し儒學を奨勵し治績一世に著聞す。



當時女流にして文藻に長ずるもの亦随つて輩出し、紀行日記を綴り自ら一篇の書冊を成せるもの尠からず。此書收むる所の胡蝶日記、記及びおと櫻の記等皆之に屬す。予此地に來任後幾何ならずして、翁の藏書胡蝶日記を借覽し其の文章の流麗和歌の卓拔なるを見、感歎措く能はず、徒に筐底に秘藏して紙魚の蝕むに任せんことを惜む。



殊に著者は妙齡の女性にして當時舟車の便未だ甚だ少きに際し山河幾十里を跋涉し、行く行く風光を賞し人情を察し興至れば珠玉の名句を聯ねて之を詠歎す。其の旅程に上るや懇に慈母の許諾を乞ひ又父祖を祀れ

る神域に詣で、は廟前に額づきて其の功德を偲ぶ。風流雅懐凡俗に抽んで文藻意氣共に穎脱して而も孝敬貞淑の女性なり。而して其の綴る所の文章亦繁簡長短の宜しき、正に地方女學生の好箇の讀物たるを知る。

星川翁夙に看る所あり、自ら筆を執りて校訂加註し當校如松會に其の刊行を囑望す、然るに予不敏加ふるに公私多端にして在苒期年未だ決行に到らず、莊内史料研究會助川氏亦郷土の貴重なる文献の散逸を憂ひ爾餘の二篇を併せて茲に發刊を斷行す、眞に同慶に堪えず。同氏の需に應じ不文を顧みず小序を草して所感を述ぶ。

昭和六年八月

鶴岡高等女學校 和田 乙 治

318-578

莊内叢書發刊の辞

封建三百年の我莊内文化の花は其地の北奥の僻間に咲いたのに比しては相當の實果を生んだものである。然しながら維新前後の再三の御國替騒ぎや其他時世の流れに連れて漸々其資料の紛失するは、實に遺憾の次第である。特に文献に於ては紙虫の喰むところとなりて離散の尤も烈しきものがある。

さきに史料發刊せしものありと云へども時の流れは早や其出版物を見るさへ容易でない今日である、然るに己に莊内史編纂會あり、又莊内史談會があるも未だ何の出版もないがこれは要するに容易ならざる難事であるからである。

吾等は自己の微力や無經驗を省みず、單に前陳の憂ひを病みてこゝに史料出版を擧ぐるのであるから、庶幾ふところは同憂同感の方々の御同情によつて莊内史資料の離散を防ぎ且又研究者の便利を計りたいと心願して居る次第である。

此處女出版の第一歩として莊内閨秀作家連の文集を會員諸君に頒配することにした。こ

れは忠徳公の致道館を創設せられしより、文教大に隆盛となりて學者を始め百般の名士擧げて數ふべからざるも、多くは江戸其他の土地に於て修習大成した方々が多いが、眞に莊内の地にあり否家庭人として主婦となり母となりて尙名文名編を残さるゝは實に其勉學努力の程は推察さるゝのである。又當時此等の婦人にして尙斯の如きを知らば舊藩時代の文化の餘香も忍ばるゝ事である。又此校合は斯道の大人星川清民先生の再三の吟味になれるものであるから此點は安心確信して出版するものである。

最後に御注意を願ふは此出版は全部會員組織の限定に付き一本も残留させぬ方法であるから、右御含みの上至急御賛成御申込あらん事を願ふ。

昭和七年五月

莊内史料研究會出版部

凡例

一、吾が莊内の地、酒井侯入部の後、武威大に張りしも、文化若かく擧らざりしが、忠徳卿の時に及び、學校致道館を建て、士庶に教へしかば、文教亦大に起れり。而して其の學監白井重固、漢學の外に博く國書を涉り、深く國文を獵りしを以て、國文學亦大に行はれたり。故に女子に於ても、各家庭にありて、歌物語の類を教習せしかば、才藻の女流自ら之に熟して、盛に歌文を作れり。此集の文の如きも、そのすさびに成れるものなりといへども、暗に男子の漢文に對抗せるもの有るを見る。

一、おそ櫻の記、溫海の記、胡蝶日記を以て上巻とし、東路の記、參宮道の記を以て下巻とす。

一、おそ櫻の記と東路の記とは傳寫の本のみなるが故に、誤謬不明殊に多し、且當時國文未だ研究を盡されざる折なるを以て、假字違ひ甚多し、是れ此時代の假字遣ひなるものにして、文跡と共に其時代の徴なるものなりと雖も、今の世の正しき假字遣を見習ひたる人には、其意味解し難きものあるが故に、皆正しきに改めつ。語格の如きもふ

と誤れりと覺ゆるは正しつ。

一、當時の筆記、行草及び變體假字を以てしたるが爲め、今の教育を受けたる子女は、之を讀む事能はず、故に行草は皆楷書にし、變體假字は悉くいろは假字に改めつ。又句讀を付け濁点を施して讀易からしむ。

一、傳寫の際筆者のうつし誤り、また情進さかしらにかき改めたりと覺ゆるもの、また全く不明のものにはマ、と小記せり。他日直筆の本に照らして正すべきものとす。

一、文語の解し難しと思ふものには註釋を施せり、是れ兒童の爲のみ。

一、文中に出でたる人の其如何なる人なるかを知る由なきに至れる有り、是れ知らるゝに至りて明にすべきものとす。

昭和六年七月中旬

星 川 清 民

莊内女流文集 上

解 題

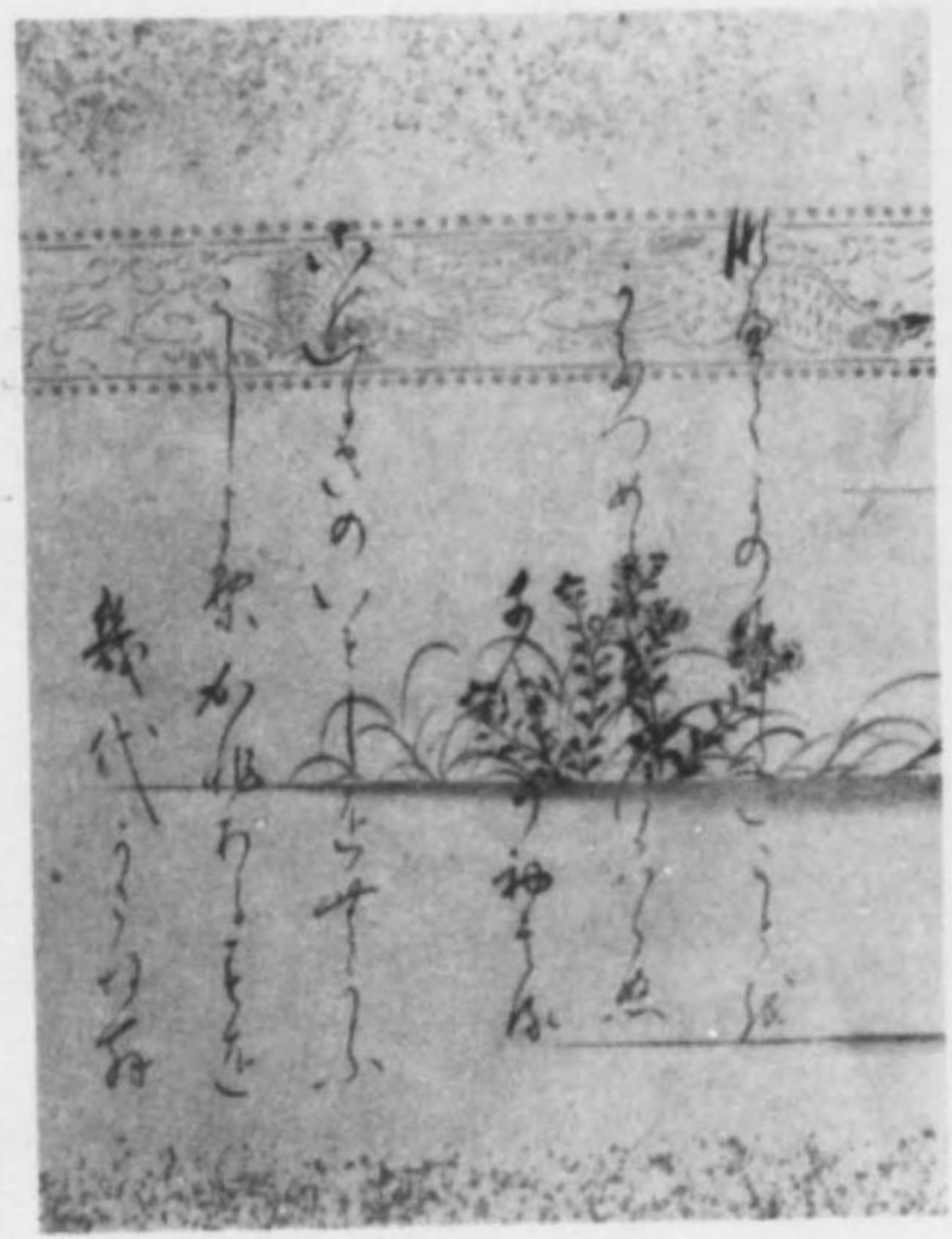
おそ櫻の記は杉山廉女の湯温海入湯の日記なり、そのやよひ十日とあるは何時の三月なるか明ならず、唯文中にことしはうゑたる國おほくて物こふ者どものむれゐたるが云云とあるによりて天明年中ならんかと思はるゝのみ、その入湯の所因は亦知られねど文中におもふ事侍りける頃かゝるあそびもおもひがけざりし云云とあればいと穩かなる折にて心ゆくまで遊べるさまをしるされたるものなり。女史は杉山宜菱の女にて十七歳にして栗原仙右衛門が妻となり男女の子をも設けたりしも故ありて離別し終に二夫に見えず孀居三十余年文化五年三月五日世を去れり。此記は栗原氏在嫁中のものか。

温海の記は池田源兵衛問の妻喜代井女(小島氏)の温海湯治の日記なり、その葉月のやうかとは酒井家轉封中止の年即天保十二年八月八日なり、故に記中所々に若し轉封したりしならんにはかゝる事は有得ざりしならんの感慨をしるされあり。女史此病癒えず同十三年

十二月二日歿せり。

胡蝶日記は白井矢大夫重行の孫千代梅女の象潟遊覧の紀行にして歸途飽海郡鳥海山の二の瀧、升田の瀧、十二瀧の巡覽を記せるものなり。その水無月の末の五日とあるは何時の年か明かならざれどもその日記の池田玄齋翁の第一の序文に天保九年十一月下旬とあれば其天保九年の六月廿五日なるべし。日記名を胡蝶日記といへるは夢物語に擬なぞへたるにて當時封建制度の事にしあれば女子など濫に他領に行く事を憚るが故に夢中の旅行としたるものなりと云ふ、時に女史深窓の中に養はれありしなり。雅號を藤の舎といふ。後年名をしげいと改め白井重則重則の孫に嫁し、元治元年九月世を去れり。

喜代井女
くさくさ海に水や功多し人老をよ
ふりてはわらふ花多し



千代梅女

雁女
はるのこゝろのつれづれ
のつれづれに
めづりたるは

雁女

おそろくらの記

杉山廉著

おそさくらの記

杉山廉女

やよひ十日あまりあつみといふ所へ湯あみにまからんとするに、十二日の夜月もさやかなるものからかすみわたり、花は盛にて、ふくるもしらすたゝすみありきて、

かすみつゝ花の光はさやかにてにほひにくもる春のよの月。

たび衣たち出ん空もおもほえず月と花とのあかぬさかりは^{二本}。

おそ櫻のかへさをたのめがほなるも、おぼつかなきものから嬉し、

しばしまて歸りくる日も程なきに外の散りなん後をたのめて。

十四日。空晴渡りて風もなし、悦て宿をたちいづ。卯のなかばにやあらん、子なりける成憲おなじくよめむすめつれたれば、とりしたゝむる事おほくて心あわたゞしく出ぬ。湯の

ある所まで九里ばかりの道なれど、かちゞを行て心しづかにこゝかしこ見つゝゆかんのねがひなれば、ななばにて一夜やどかる豫期あらまじなれば、野あそびの心ちしてむれつゝゆく、菜の花はるゝ咲つゞきたる所あり、

家ごとにとめるとや見んさく花のこがねにまがふさとの一村。

清水ときげどながれもなし、しみづ大くらくといひしものゝふのたちのあとあり、

立よらんかげは見えねどまし水のながれての世に跡はありけり。

夏わたりといふ河橋をわたる、いにしへは春秋は水ふかく冬は雪つもり氷とちて夏のみかちわたりせし故の名なりとかや、名も新ばしときげば、

あらたなるはしはわたりも安きよに春行道はいとゞのどけし。

からす塚なんぞいへどくろくもなし、かたちもにす、いかなる故にか、からすの一羽とまりぬたるは折からつ突居たるなるべし、水澤といふに山あり、坂をのぼらんとてしばししば生にやすらひて見るに山々櫻さきたり、

山深くいざわけ入らん櫻花くものよそめに過なんはうし。

さかをのぼれば花咲たり、

行末の花のさかりを見せがほに山口しるくにはふ一本。

くだりて廣はまといふ田の中へいづ、いつの頃にか此あたり海なりしとぞ風いとほげし、

廣はまど名にたつ波のなごりにやたもと吹こす風のはげしき。

又しばらく行て山にのぼる、これも少しのさかなり、矢びきざかど人のいへば、

あづさ弓矢びきの坂を春行けば花の木かげにまづぞ立よる。

此きし道にかた貝といふ所の山そばに、とび松とかや大なる松の大かさのやうに茂りて其上に又かさのやうにしげりたる梢は五えふなり、二葉はくろみて五葉は青く一ツ木なり、所のもは飛つぎまつとぞいふ、此やすみたる山よりいとよく見ゆ。

峯におふる松は一木をみきなして二は五はの枝しげるらん。

むまの時の半ばかり三瀬の宿すくにつき湯あみなどして氣比けひ權げんへまうで侍る、あるじあないす。をどゝひまつり侍りて來んとしのまつりとりおこなふものゝ方へ、御ほこわたすに行あひぬ。折しもあれどいとたうとくおぼゆ。そこら見めぐるに御こしのまつとて、大き

なる松の枝たれたる有、神の御こしのわたらせ給ふ時はたれたる枝たちのぼりてさはりなしとかたる。ふしぎにおぼゆれば松かさなどひろひていへづととろざす。やしろくへまうでてけひ臺のいけ見にゆく。山奥のみたらしなり。ちりもくもらす、そこひもしれず、秋冬といへど木の葉のうかぶことなしかや、大きな木ども生かゝり水とりなど遊ぶ、いとよなき大いけなり、物すごきさまなればをろちなごいふものかならずすみぬべしととろさむくおぼゆ、

くもりなき池の鏡のそこふかみ神の心のかげやすむらむ。

おそろしくてそこく〜に手むけ侍りぬ。その道に竹いとおほかり、大きやかなるたけの千ひろに茂りてくもにもつゞくばかり、とらもふすべき野べなり。めづらしく見つゝ行に、國々をめぐるす行ぎやう、修行ぎやうまたたまたままうでくる者、名を此たけにほりいれて侍れば、みづからもともなひし者にいとよく物する人あれば、小がたなの先してゑり付けさす。

しげりあふ千尋の竹の深みざりすぐなる神のこゝろをやる。

此たけ一尺にあまるばかりのまはりなり、ことばぞあまり何のふしもなきや。葉山のやく

しといふは、そのかみよしつねのみちのくへおもむき給ひし時、一夜あかし給ひし跡なればまうでんとおもひ侍りつるが、さかしき山なればおぼつかなくてふもとよりはるかにをがみて歸りぬ。此山もるすげんぎ、有のあなるが、それがもとによしつねのおひむさしの何がしほうしとかやのも、山よりもてきてひめおくををしへ侍りて宿のあるじさいだちて見す。まことにむかしおぼゆる物なり。義經公のおひは、そこにあまつをどめのかたちをほり物せり。うちにはくたみたれどそこはかともわかず、をとめのかしら計ぞ見ゆる、うちに三寸よりみじかき御ほごけます、いかなる御ほごぞとへば印むすばせ給ふみてのそこなはれてわくかたなしとこたふ。むさしのおひの中にもおなじやうなるまします。貝ひとつあり、今の山ぶしのもたるよりはるかにちひさしねやいかならん。しづか御せんのなきなた、かけ物などあれごいかなる物にか、かけ物は後鳥羽院の御筆ともいふといへど、いづれにも織物このもしなればしづか御せんのはたおりけんもいぶかし、後鳥羽院の仰ごにておりけるものによ、いまの世のおりものは見えねど、いはれこゝろもとなし。なきなたはうけられぬやうにおぼゆ、みなる所もえにゐる所もおなじやうにて大きな

なぎなたなり、女のもちたらんひがくしきやうにおぼゆれど、いにしへはともゑといひし人もその頃なれば女にしもさるつはもの有けんかし。みづからのいひがひなきにかくはおもふにや、しづかのなぎなた計此國へきたりけむもいぶかし。まことにや此わたりまでこそ身をやつし給へ、此すゑはさかることもなしとておひをも此御だうに残しおかれしとぞ、偽なきものとおもへばたれくも涙おとしぬ。いく百とせのすゑに残りてその折のまへの心ちして、その人々の千々にくだき給ひけんころのほど、あはれき今のごとくむねいたくて、

名はのこり身はちりひちの山ぶしのかひなき跡をたれかをしまぬ。

宿りに歸りてさま／＼物がたりなごする程、此度つれだち來りし琴ひくほうしの親のもともちかければ弟などむらひ來るに出あひ、かれよりもこれよりも物おくりなごしてもてさわぐほどに、ゐのこくばかりにやなりぬらん、打ふしたれどなれぬたびごちしていもねられず。さかうみじろくほどに、すこしまごろむとすれば海ちかき所にて曉のあらしにめをさましつ、すまのすまひもふとおもひ出らる。

十五日。けふは濱邊にあさりせん預期とあらましかければ、人々をおこしてとくいでなんといそがしたつれど、人も馬もおそくて辰の刻計きざしになりぬ。出さまに法しのいへのまへわたりすれば、ついでもよし親に物いはんとてたちより侍りけるに、此おきなどは九そち三つになんなり侍る、みづは少しうとけれど、いさゝかたがへる所もなく、七そち計と見ゆ、ゐなか人には、ころなんめづらかなるおきなにて、まなぶといふこともなければ、老莊の心ばせむまれながらにして、ことすくなれどけしきいとなこやかなり、としはいとたかし、みづからは常にくまじき道なればわか行ほご心ぐるし、人々送りて山のふもとまでくる、かへさをたのめて歸しつ。かさとり山といふをのぼる、此さかはさのみ高からねどたうげのやうなる所そのまゝ海にむかへば風のはげしくふきあてかさをとらるゝゆゑにかくいふとなん、げにも風はげし、雨ふれば「ときゝし山とはここかはれり。坂をこえぬれば千さとの末もかぎりなきおきつ白波よせ返り、そらはかすみのきはもなく、日かげうらくとかせもなし。いかに吹まよひてか、あの山はげしかりけん。見なれぬあら海のおもてもろこしまでもかよふかと、雲をひたせる波の遠かたより、こてふなごのとぶやうな

るものゝくるまゝに、見ればほかけたる大舟なり。左は山みぎは海にて、みちのはゞ七尺計やあらん、それよりせばき所も侍り、きしの高き所はびやうぶなごたてたる様にていくひろともいふべくもなし。千尋とは、かゝるやごおそろし。ひくき方は出なごへだて、海のみゆるもあり、さまざま山にそひて行く道なれば、なだらかなるさかしき所いひしらすかずゝなるも、みちのきしならねごあからめなせそ、暫し餘所目ト云フコトとわかき者どもをいさめて行、おそろしき所々あれば歌もよまず。名さへおごろゝしきに、おにのかけはしごかや、山ぎはの岩より橋のやうにさし出たる岩にて、その下をゆきゝせしごなん、いにし比大なみにくだけで跡ばかりのこれり、岩の中にかけてる跡きりくひなどのやうに見ゆ。繪に書きたるごどく山のこしをふみわたる道なれば、めぐりめぐりていく重ごもなく、今來し道の何かたとも見えす、海にのみ望む所も侍り、またこしかたはるゝとひと筋の糸ひきはへたる様に見ゆるなど、おそろしき所もあれど、すべてさまざまめづらしくをかき所々あかすおぼゆれど、わかき者どもの海原の遠きのぞみに心をうばはれてつまづきたふれやせんと、あしもごあやうくて心のまゝに詠かねつ。山々を見るに瀧ごもいくらも流れおつ、はるか上よ

り落る瀧の上にはしをかけて山がつかよふ道あり。

きゝわたるきそのみさかのかけはしもかくやあやうき道にかけゝん。

一本に「道にはかけず」とあり一本の方なれども「かけじ」と未定にいはざればきこえず「けん」は過去の推量なれば上句にうちあはず

此所は越に行來の道にてむまの行ちがふ程の事なれど、めなれぬ道ゆるあせあゆる計のをりなんあるを、なれたる人はわらふめり。さごがしまあを島などはるゝ見わたさる、さごはかすみてかすかなり、青しまは山のやうにてしろく見ゆ。

名にもにすつもれる雪ご見ゆるかな波まにかすむおきの遠しま。

沖つ舟の遠くちかくうかび来る、

くものうへにまがふ木の葉ご見るまゝに風にまかするあまの釣舟。

行くゝさまざまの岩のかたちによせて名づけたるいとめづらし。そが中にも名をめづらかに覚えしは、所の人義經の馬場ごといふなる。此行道より三尺ほごしもなればおりたちて見るに、はゞは四五間もや侍らん、長さやいかにごをのこごもかぞふるに、三十けんに少したらずごかやいひさわぐ、たひらかにてたゝみのうへにごごなる事なし、波よる方は

三四尺のたけなる岩土手といふものつきたてたらんやうにて、こゝは波もこさず、馬だらひとて中ほどに少なるあなぞある、誠馬あらふたらひほどぞあなる、所々馬のあしあとのやうなるかたつけり、よし經の馬ばとは誰が名つけ、んかし。それより濱邊におりたちてかひ、ろひ石なども遊ぶ、風もしづかにて遠あさの磯におりてそぼれあへり。たて岩なごめなれぬさまなり、雲をしのぐばかりにたゞたちにたちたる岩にて、らかななどの立ならびたるやうなる岩ぞあまたならべる。何くれとする程に、けふ跡より古さと出しつれの人々はや來つきたり。これよりはまべは過ぬ。細き谷川に柴はしわたせり、ほそろきのはしといふとて此のつれたる法師「山姫のさらせる糸か谷川のながれもきよきほそろきのはし」といひてみづからにもよめとすゝむ、こうじぬといへどしひてせむれば、

おち瀧つながれのおともかすかにてをりしく柴のほそろきのはし。

むすめの道にこうじて物うがるを、どかくいひなぐさめてやう／＼に宿りにつきぬ。跡よりきたりし人々はとく來つきて待居たり。入口より物どもとりひろげて湯あみなどしてさわがし。はしつかたに出て見ればそのまへまへむかへる山に櫻さきたり。

咲出る花にこゝろはあらざらめまちえがほにも匂ふ嬉しさ。

たゞ一木さきたりしが日にそひてこゝかしこ咲る、かぎりなく嬉し、山路の草に火なんつけてやくなるおとおそろし、たゞこゝ元にやけるやうなり、夜になるまゝにそこらあかうなりて火のあるやうなり。

やけやたゞ光によるも花ぞ見んつまもこもらぬ峰のわか草。

月見に出あるく、ながれ清く月は山のはにかゝりて、かすめる空あはれいふ許なし。たれしる人もなければよなく／＼なりのりつれて三人四人たゞすみありく。

十七日。待どほなる月の光を先だて、見ゆるが、此むかひたる峰より東のかたなれば田面より見ゆやとたどり行、やう／＼さし出る程めづらし。

山のはの花のひかりにさしそひて霞を出る春の夜の月。

たびなれば十八日心ばかりに奉らくす。編者云、奉らく、法樂の事か、神佛の手向にするわざな法樂さいふ

旅宿花

古郷にかはらぬ花の俤をたびのやどりの友と頼みて。

ほうしをせむれば「ぬしゝらぬ花はさかりに咲きみちてたびの宿りのうさもわするゝ」
 廿日の題古さとの人々へも申しおきたりしかば、なおとりそとはげまされて、なりのり、
 松上藤夕待戀といふをよむ、「咲ころは外山の松も色そひてみごりをこゆる花のふち波」お
 そしとてくるゝをぞまつ逢夜半の明るをうらむかねのひゞきも「ほうし」峰いく重咲つゞき
 たる藤の花波かどばかりひゞく松風」かならずとちぎり置しもいかにぞとたそがれ過ぐる
 程ぞものうき」

なごと思ひくゝの事どもをきゝてみづからも、

うづもれて松は音なき風の色を花に見せつゝなびくふちなみ。

あふ事はいつをならひの心にてたのめぬくれをまつもわりなし。

ひら清水といふところ水の名たかければ見んとてゆく、遠からぬ程なり、げにも名になが
 れたる清水にてあちはひあまく清き事たごへんかたなし、かひの雫の様に見ゆ、かみに瀧
 ありて岩山のあひだをくゞりて落くるとおぼゆ、その外にも水の落くる所数しれず。あつ
 み川とていとほやき大きなる河左のかたにながる、岩にせかるゝ瀧川のけしきたとしへな

くみなざりおつ、瀬々の大岩をこえ行波もありわかるゝもあり。

立歸り見てをゆかなん山川の音のみきゝし水のしら波。

瀧ある下に柴ばしかゝれり、岩にあたりてさま／＼にめぐりおつ。

見なれずよ岩間づたひにおちたぎつおともはげしき水のしら玉。

おもしろき瀧にてその後も此もとへをりく遊び侍りし。谷川に花の流れたるが物にかゝ
 れるを見て、

散りかゝり岩にせかれてなかれえぬ花ぞしがらむ春をよごめて。

なごそゞろごといひありく日も侍り。此ちかきあたりに正徳寺ごなんいへる山寺に、やく
 し佛のたゝせ給ふにまうでて見めぐるに、ばせを翁の塚侍り、あつみ山やふくうらかけ
 て夕すゞみとゑり付たり。

世にひろき露のかた見とばせを葉の此山寺に名をのこすらん。

鶴の湯はわきそめし始にて、あしをそこなひけるつるの折々來りてあみけるより見出しし
 とかや、人の家のかげにぞありける。

わきそめて里のさかえもつるの湯の千代萬代のするもかぎらじ。

かたはらなることどもいひて心をやりつゝかへり來ぬ。琴もたせて來り侍れば娘ごもつれ
くゝわぶるなぐさめに、日毎にひきまさぐればたびのやごともなくにぎはし。

ひきつれてうき事しらぬたびの宿千年もあかじ峰のまつ風。

こゝろのごかにありたきまゝにくらし侍れば、日數のすぐるぞいとはしき。みねのさくら
のうつろはんや色かはり行ぞ心にあかぬことなる。

くるとあくど詠せしまにうつろひぬ日數は花のいろにしられて。

ちかき濱邊に貝ひろはんと出る日も侍り。切ごほしとて岩の中を行く道ありければ、

かしこくも誰ふみそめて行かよふたゝむ岩ほの中のほそみち。

波いと高く胸にひゞくやうにてうごましければ歸りなんどするに、今しばし行きてしづか
なる所ありと成憲がいふにまかせて行けば、げにもいとしかにあさし、いとさよらかな
るいそにてみなおりたちて石かひなごひろふ、

貝ひろふ清きなぎさにうち出てまじることばの玉もあれかし。

おもふ事侍りける頃かゝるあそびもおもひがけざりしなご心のうちにて、

世をうみとおもひ果しをけふこそはながらふる身のかひも拾ひぬ。

廿日餘りするの八日。義經記に侍るねんじゆが關見んとて出てたつ。こゝは道も遠けれど
辨才天のましますしまこそいづくにもまれなるのぞみなれ。ときけば、ゆかしくて朝まだ
き霞とゝもに立出行く、すさきにかもめおほくむれむたり。

しら波のまなくよせくる沖つすになるゝかもめのうちもさわがぬ。

ひだりは山右は海にて此頃さし道よりもながめことにしておそろしげなし。

たゝみなす山にはほにみぎひだりゆくゝあかぬ春の海づら。

わさ田といふ所の磯山に櫻おほく侍れど散過たり、

波かゝる磯山櫻ちり過て残る色香ぞ見らくすくなき。評、さもど おもしろし

あまのつり舟の朝なぎにこぎ出たるがおそくそく歸りくる、立よりて見ればあみよりいを
ごもとり出す、ひれなごうごくいとめづらかなり、そのあみをかけてはすを見て、
かけてはす綱の手繩のくるしと思はであまの世やわたるらむ。

せきといふ所ちかづくまゝに、うみのおもていよ／＼しづかに、岩のたゝすまひなだらかにて、くもりなき日かげうら／＼とかすみわたれる波のうへを、小舟こぎまよふなごゑにもかゝまほしく、寛かに打開けたるコトゆほひかななるながめなり。すみよし坂といふをのぼる、すみよしの御神たゝせ給ふと後にぞき／＼し。いづくにかありけむ、かたつ方は海にのぞみて、此頃きし道にいさゝかにたるやうなり、おそろしからずもあらず、のぼりはてゝすこしくだれば、心ざす辨才天のしまはるかに鳥居なごちひさくかすかに見ゆ、ゑにかける天のはしたてのこゝちす。坂の中にまごゑして眺望に時移りぬ、あはぢの島はいかに見ゆらん、むべ心あるあまやいひけんぞ打おもふまゝに、

すみ吉とむかふしまねをあかず見て心あるあまや名づけそめけん。

こゝもとにある君のおかせ給ふ關なんありて、しばらくさかひを出れば關守につけて行もたびなるこゝちす。ほごなく辨才天島のむかうなる濱にうち出ぬ。ことしの春大波に道のすなくづれてかちどにて渡り行事かなはずときけば、いと口をしく本意ならねごこゝよりをがみ奉らんと、うしほにて手あらひ口すゝぎはるかにをがみ居たりしに、此あたり相し

れる者ありて宿なんかりけるが、そのもとよりおとな／＼敷舟人やどひもて舟をこぎよする、ゆくりなく海にのり出ん事いとうしろめたく、わかきものごものはのこして、なりのりとみづから計わたらんといへば、我も／＼とぞいふなる、さらばとてよめ、娘今ひとり、なりのり、みづから五たりぞのれる、舟のちひさければとも人は跡よりわたさん、といふ舟人にまかせてのり出るに、波はいさゝかもなくめづらしき舟路にてこゝろもなごぬ。壹丁ばかりもや侍るらん、波の上なれば計がたし。鳥居のもとに舟をよせて岩のうへにあがる、庭の石おきたらんやうにならびたり、ひくき石はうしほの少しこゆもあり、大波にこのいしのうごかぬもふしぎなり、しづかなる事池のやうにて、あさければその玉も、手にとる計なり。御やしるにまうでてぬきたてまつり、えんに居て見たせば、こし方はる／＼と見ゆ、すゑは越後の國までくまなく見やらる。おりてめぐり見るに、もろこしの西のみづうみはかゝる物にやとおもはれて歸らんこゝろもなし。見るがうちにとも人もおひ／＼とわたり来てしきものどう出ではまべにゐるもあり。のちにきけばうしろの山ぎはに龍燈岩といふ所に清水ありとなん、所の人たつのもし火をつねに見るといふを、岩ばか

りも見ざりしはいとくやし。御やしろの柱に歌發句など書たる跡あればみづからもかきつく。

きしより見るにことばもあらそそのなかにしづけき波の廣まへ。

道につかれていきもつきあへねばいひ出ることの葉もなほさらつゞきがたし。又舟にのりて歸る。やざりにいこへばあるじさまぐもてなす、ひるけたゝめて娘などいたくこうじぬれば、ふすまうちかづきていぬめり、みづからも少しよりふしたれど、こゝまで來りしついでにねんじゆがせきもゆかしければ行て見んとおもふ、今はねすがせきとぞいふ、關守のおこたりなきやうなる名なれど人もゐず。ねすみくひ岩といふよりいひなれたりとかや。宿の主にとへばさかひをはなれて、越後にあなり。さきだたんといふ、よその國もめづらし行て見んと心をおこして出たり。成のりぞしたがふ、わづかに六たりみづからともに女ぞ三たりなる。此岩を出羽と越後とのさかひといへど、こゝもどになほこしの地まじれり、中はまといふ所にかの岩なん侍る。はるくまさごの上を行、ひつじ計にやあらん、日は中ぞらにしていとあつし。此はまべは波あしく風さわがし、風の吹出たるとおもへば、さ

にはあらで海のあしきなり。からうじて行つきて見るに、げにぞ此いはきしより見るはまされり、紫のいろしたる大きな岩の中を、ねすみのくひぬきたるやうになりて、その中をゆきゝすめる、ねすみのもちひくひかきたるにすこしもたがはず、外にもそのさましたる岩おほく侍り。たゝみの十ひらばかりもそのよもしくべきいはやなど、めなれぬ事どもを見れど、あつきに道にこうじてこと葉もなし。ことしはうゑたる國おほくて物こふ者どものむれわたるが、むかし物がたりにもさやうの者のぬす人をなすときゝ及びたるに、人すくなにてよ所の國までうかれ來てことなる事もあらばいかにぞや、とむねうちさわがれていそぎ歸りぬ。しばしやすらふ程に日もしにめぐればたちいづ。もと來し道なればかはることの葉もなし。すみよし坂ぞかへすく辨才天のかたをかへり見せらるゝ。かまやざかといふ所は坂にはあらではまべなり。こゝにて物うち敷わりごさごえなどとう出て海に入る日を見んとてやすらふ、波間をわけ入る日のあかねさす光に四方のかすみ紅なり、日はいと大きくなりて波の上にとゞよふ、

かすむ空のかぎりも波にうつろひて入日のかげに匂ふ海原。

入はてぬる名残もなほあかし、しばらく行てもと見しきり通しよりくらくなりてともし火
どり道をいそぐ、宿よりも迎のとも一火もて來たりてくからず歸りつきぬ。のこり居た
る人々まちうけてねぎいふ、古さどよりたよりありて文何くれとおこし侍り、それなど見
つゝ何やかやとまぎれてけふの事ども打物がたりふしぬ。

三月盡にもなりぬ。

しる人どたのみし花もちりはてゝたびのすまひのなぐさめもなし。

といへばほとゝぎすにおもひかへてよこかたはらよりいふ。春をゝしむ心をよめとすゝめ
られて、

まてしばしたびの日數はのこる身の鳥はふるすにかへるさの空。

なりぬり「春もたゞ此くれのみに成りにけりをしむにたへぬ入相のかね」法師「けふばか
りいそがでくれよ大ぞらの春の名ごりどくもをだに見ん」

朔日にもなりぬ。

こき入れしきのふの春の花の香をかへなでをしむたびの衣手。

ほうし「夏衣けふたちそむるたびの空山のわか葉もきつゝなれぬる」なりぬり「櫻色にそ
めし名残もけふよりはみごりの衣かゝるやまやま」などとはかなしごごどもいひあはせて
あるはいひおとし、かつむつかりなごたはぶれくらす。
二日。けふあすははどかる日なれば琴はおしやりて當座をなんよむ、雨さへふれば、

旅 宿 雨

たびねするまくらの山はくもとちてかたしく袖に雨ぞふりくる。

成 の り

さなきだに露もひがたきたびまくらはれぬながめにまよふうき雲。

ほ う し

村雨のなほそでしぼるあはれさにたびのかりねの夢もむすばず。

その外にもいと多かりけれどこれにかはるふしも見えねばしるしばかりにはじめの題ばか
り書とめつ。

三日。夕つかた例のやくし堂にまゐりて、なりぬり

見し花のにはひをかへて山のはにわか葉もりくる三日月のかけ。

かへるさ小田に月のうつりければ

かげうつすなは代水にこん秋をたのめがほなるよひの三日月。

宿のあるじなさけあるものにてこのごろの歌書てそのぞみ侍りければ、二三首かきてつかはす、いとかたはらいたれどいなびがたくて。此出湯のえんぎをちかき山でらよりかりもてきて見す。いと久敷事なり。

わきそめし神のこゝろも汲てしるこゝに出湯のふかき恵を。

と書きてやる。うしご屋といふわたり藤多くさかりなり、こひ津ごえごか戀路ごえごか名はなつかしげなれどいとおそろしき山河なり、朝のあひだ人のおほからぬ程出て遊ぶ、瀧のもとに藤咲きたり。

おち瀧つ岩ねの水のしらあわにまじりてかゝる花のふぢなみ。

一枝をらせて

朝露にねれてぞ手をふるふぢの花うらむらさきの春のかたみに。評、字不明

此頃はほとゝぎすをよるひるまつ事なり。ほうしのいへる「いく夜半か夢もむすばであくるとも山ほとゝぎすなかぬかぎりは」とよみておのれ名歌よみたりほとゝぎす來なかとほこりにいふを、をこなりと人々わらふ。なにくれとする程にあす歸りなると物ごもどりしたゝむ。つねにまわりかよひしかのやくし堂その外此わたりにたゝせ給ふ神ほとけにまわり申つゝ、又來んとしもさはりなくむかへさせおはしませなんどのりて歸らんとするに、やくしの山のはに木だかくほとゝぎすきこえければ、

ほとゝぎすまた來んとしとちぎりおく山のかひある今の一聲。

いま一聲のきかまほしさに立やすらへば、をちかへりなくにえしもかへりやらで立わづらふ。

さらでだに名残を思ふ山のはに聲をつくしてなくほとゝぎす。

此ほうし「さごまではいたらぬ木々の奥ふかく山時鳥なきわたるなり」。歸りきてかたれば、成のりは事ごもしたゝむるとて残り居てくやしがる。ほうしはおのれよき歌よみたるしるしなりとてひゞらく、振蕩とどりをかし。成のりはねたがりて、「いざごはん又もなくべきは

とゞぎすひと聲をだにきかでやまめや」とてにはかに立出んとするに、むかひの山のはにきてあまた聲なく、心をやりておちぬ。

をしみこし名残をこもにしたひてやたゞこゝにしもなく時鳥。

いつしか歸るさになりぬとて名残を、しめば、ほうし「手を、りてつもることのはかぞふれば出湯のささに日かすへにけり」人々いさまこふとて來こみていとさわがし。

七日。けふは空も晴わたりていとよき日なれば歸りなんと出でたつ。まことにはあすにて日數みてど雨風もうしろめたくけふ出るなりけり。成のり、夏のきてけふぞ出湯のさど出ぬ又こん春のちぎりをぞまつ」ほうし「一とせの過るをかねてちぎれどもいでゆのさどの名残つきせぬ」などいひあへるをきいて、

心あれば一夜の屋ども立うきに日かすなれにし名残をぞおもふ。

出さまにおのゝ物にかいつけてかたへにさし置つ。すべて此程仙人のほらにも入にたるナリにし心ちして、時つぐるかねもなく、曉告る鳥も聲せず、よとなく晝となくおきふし心にまかせて、花に月、山に河、海さへちかくてあかぬ事なく詠くらしつ。庭のうちに山水をせきい

れて瀧のもとによりて手してむすふ、きよき事いふべくもなし。はじめの程はいわうといふものゝ香していどうるさかりしが、なれてはいとよく身もかろく心もなやましからず、かくてあらば千とせもへぬべき心ちなんする。名残つきせず出行、道々ほとゞぎす送るやうなれば、

いへづとにかたらんよりはほとゞぎすいざともなはん古さとの空。

名残なほあかでわかるゝたびの空なきてや送る山ほとゞぎす。

山のけしき水のながれ心のごまらぬかたもなし。

山河もあはれと見すやなれゝてまたいつかはとおもふ別を。

心なき岩木にさへ名ごりおほかり、左の方河をへだてたる山にうぐひすたえずなく、行道の右のうへなる山にほとゞぎすあまた聲して見きくにいとまなきまでなり。

春と夏といづれこゝろをわくかたもなくほとゞぎす峯のうぐひす。

藤のかゝらぬ山もなし。

かへるさのこゝろにかゝる花かつらひきやとどむるえだのふぢ波。

七まがり坂といへどいく重ともなく登る、のぼり果てみなやすらふ所にも藤咲たり。

行なやむやま路のふちの花ざかり見る人ごとやしたにかくる。

こゝより見れば海のおもていとしづかなるに、ちひさき物のあるを遠めがねなどして見れば、舟のうちに入つてつりするぞ見ゆる。

和田の原まがふ雲のの小ぶねをも手にとるばかりうつしてぞ見る。

すゝといふ所にいたればあま共あまたさわぐ、何事にかとへばいわしといふものゝわくといふ、しばしよりて見れば、げに海のおもて所々つよき雨のふりおつるやうに波のわきたつはうをのをざるなり。おきの方よりぶりといふものゝいわしをのまんとておふにおはれてうらによるとかや。一とせ二度計としによりて三度もあれどめづらしき折にあへり。いざ給へうをゝとるを見せんといふまゝにえんにのぼりゐて見るに、此家あまのどまやならず、いときよげにつきくし。あるじ何くれとをしふ。此しもをあま人も大き成柄えつけたるあみもちて、いをゝすくひ入て箱にして宿へ持行、うちあけては又ごりにく、やすといふ物手ばこなんど見るやうなるにて、大きないをゝつきてとる、つきあてゝよろ

こぶもあり、とりはづしてさわぐもあり、こなたへむれくると見ればかなたへをどり行、とりはづさじとはしりちがふいと物ぐるはし、わかき者どもはおりたちて見きようす、たはむれに、

さわがしのあまのしわざやよるいをのかへらぬ先と網も取あへず。

龍燈庵といふあま寺に立よりて見る。女の身にてかゝるはまべのすまひ心ほそき折もさこそありなめ、いと物しづかなり。それより小ばとゝいふ所に休所侍り。かたへにたてたる板戸を見れば歌詩發句などさまさま書付たり、みづからも少しやすらふあひだ、波風いとすゝしくて扇うちおきたるあひだの手すさびに、

書すさぶ人の心も此濱の見るめにあかぬ餘りとぞしる。

誰ごもしられぬをよきにしてはかなのこと。はや三瀬の宿すくにつきてゆなどあみてやすみけるに此所のはまを見んと子どもすゝむれば又出ぬ、かひゝろひつりなどすれど、みづからはそこなる岩の上突につい居てあしのいたければとくかへりなんとて岩ほのなきすなはまへおり出たれば、さまゝめなれぬ草ども花さきたるも花をもよほすもめづらかに覺ていへ

づごにとらする程日はくれぬ。此ほど來りしをり、よめ娘のあすの道につかれ侍りければ、此度はふたりのものはのり物してかへるべし、と古さとへ申やりて、をど、ひより來りなれば、その事ども申付けていぬるに、こよひもはしちかき心ちしてれいのいもねず。朝とくおきて、けふは

卯月八日なり。やくし佛の御まつりなりと昨日よりき、しを、わかき者どもさうぞく装束き、さうぞくさうぞく、さうぞくはたらかほごに、此さき見ざりしやくしの峰へ登らんといへば、成のりと法師ぞしたがふ。道のさかしきさけば女をばとめてをのこばかりともしてゆく。おもひしよりさかしき山にてやうく成のりにかゝりてぞのぼる。からうじて御堂につきたり。近くをがみ奉る。御だうはあらたなれど、かのよしつねのつとめ給ひしみほとけとかや、むかしの跡よりすこし山へ引いりて御堂たてり。古道といふあり、是ぞ昔のあとにて、はまよりのぼる道なれば、こゝよりもからしとてこなたにうつし奉るといふ、ほそ道にて笹おひしげりたり。

さゝ分けてむかしの跡をめのまへにむかふあしたの袖ぞ露けき。

かへり來ぬればしたゝめども出來ぬ。ふたりの者人をわけてさきへ歸しやり、しばらくみづからはやすらふ。こたびのみちづれおほしといへど一人は四五日さきに歸りぬ、ふたりは昨日ともに宿は出しかぎきのふのうちに古さとへ歸りぬ、けさはふたり先へかへし、みづからなりのり今ひとりのつれとあとより出たつ、ほうしはひと日二日親もとのこる、おもひくの歸るさもめづらし。

かへるさほともなふ友のあとさきにつらを亂せる春のかりがね。
ほうしの残るに、

わかるともまたあふ坂は程もあらじ歸來る日にせきしなれば。

いひすて、出ぬ。宿のあるじほうしのはらからなんどおくりす。道すがらやくしまうでいとにぎはし。いにしへむさしのよりくだりし折から、大石田といふ所のやくしへけふなんまうで侍し、その折もかく行き、多かりしが、めなれぬ故にやいとひなびて見えしが、此度はなれぬるげにや、とし月移りて人の姿もむさしの、ふりをまねぶ故にや、にくからず見ゆるも、あるはみづからのひなびたるにこそあらめ。

おもひ出る三そぢ餘りの春過てけふの卯月のたびもめづらし。

山も河も藤にうもれたり、

かへるさは藤のなかゆくたび衣花にわけ來し春の山みち。

夏わたりにつきぬ。むかひもこゝに來れり、日も高ければこゝろのどかにうち休む。此むかひなるやすみ所に都へ行人のむまのはなむけするどて人おほくつごひたり、見しれる人もあればすおろしこめて見る、遊びめなごまじりて酒くみかはしるひのまぎれにうたなごうたふ、皆出行をまちて自もいでつ。

春に見し雪氣の水ものこりなく夏わたるせは波もさわかず。

これより宿りへいそぎて歌もよまず。おひくむかひに出る人に逢てにぎはしくやどに歸りいりぬ。人々待うけ、さかへりし者どもとくつきてまちぬたり。湯のみなどして心もおちみつゝ見わたせば、花のさかりに立出でしにこちたき青葉になりてたのめがほなりしおそ櫻も夏木だちなり。

たのめおきしゝるしやいづらおそざくらしげること木の中にまぎれて。

歌詞ともおもしろし

かすくの言葉の花のいろにかに

みぬ野山をもみる心ちして

正

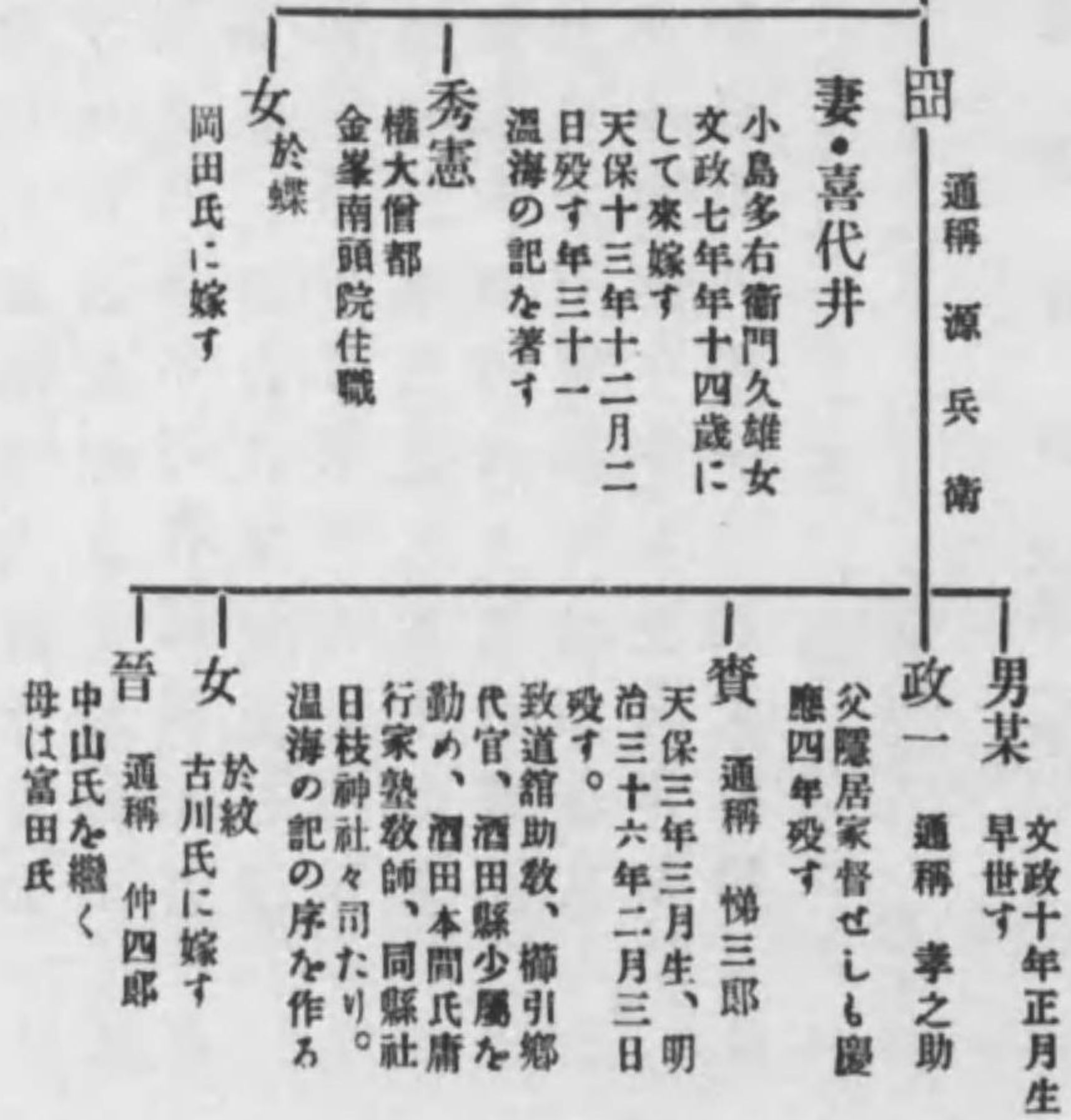
溫
海
の
記

池田喜代井著

温海の記
池田喜代井著
五

池田氏系圖 並 立齋翁略歴

池田玄齋 羽州莊内の人。家代々藩主酒井氏に仕ふ。幼字は祐治、實名は禮之、後禮孺に改む、字は子和。安永四年乙未十月十五日生る、嘉永五年壬子閏二月十七日歿す。壽七十八、文化元年甲子年三十歳を病んで廢嫡、名を玄齋と改め愛山と號す、玄齋を以て行はる。廢疾の故を以て専ら文事に親み終身仕へず。操觚を以て弓馬に代んさせり。當時藩學専ら儒學を修む。玄齋謂へらく、儒學それ齊家治國に資すべし。されど皇國自ら祖宗の訓あり。又自ら言語の道備はる。學は皇學を経とし漢學を緯とし、長を取り短を補ふべしと。是に於て奮然志を立て儒學より轉じて皇學を修む。されど僻陋良師に乏しく専ら書籍にありて其蘊奥を極めんとするの外なかりき故に常師なく又學統なし。只和歌のみは同藩歌人杉山廉女に學べるも、古學派の影響は受けざるが如し。歌稿あり家に傳ふ。著すところ弘采録百三十餘卷、病間雜抄七十餘卷、窓の燈五卷あり共に隨筆にして他人の著書の抄録多しと雖も、地方の傳説、文獻、又當時の出來事等史料に供すべきもの尠からず。尙莊内の古記録を網羅せる大泉叢誌(酒井家所藏)の編纂に參與す。晩年門に遊ぶ者頗る多く、皇學普及に貢獻あり。



母氏隔世三十餘年、有溫泉記存。伏讀之、近接乳下、吾折臂亦浴。海雲半霽、微陽帶紅、有鳥橫焉、有巖立焉、如記所寫。兩巒對峙、垂蘿之下、比屋湯霧、如記所景。悠路幽里之佳、殆真乎。吾不習國文、巧與不巧容喙哉。然吾携來女兒鍾愛焉。若無之缺乎。一昔母氏無資、免吾于懷。山川懸絕、眷憐奈何哉。足以所有想所無。吾趾所履涉、目所感觸、無爺于歸告。昔母氏風藻之言、報王父之前、一篇三致懿孝、奈何哉。足以所無察所有。蓋於爲淵。晉李密恩愛極、有文稱陳情表、金石響。然乃情所密、文亦有所臻乎、否乎。母氏此病不起、踰年卒。其昆大津知至、白季執之遺、玉井老媪、駢通皇邦學。一二刪、文益精云、是爲序。

明治八年甲戌六月

池田資誌

田資

君錫

右直譯文

母氏世を隔つること三十餘年、溫泉記の存する有り。伏して之を讀むに、乳下に近接するがごとし。吾れ臂を折りて亦た浴す。海雲半ば霽れ、微陽紅を帯び、鳥有り横はり、巖有りて立つ、記して寫す所の如し。兩巒對峙する垂蘿の下、比屋湯霧、記して景する所の如し。悠路幽里の佳殆ど真なるか。吾れ國文に習はず、巧なると巧ならざるとは喙を容れんや。然して吾れ女兒を携へ來りて鍾愛す、之を缺くこと無きが若くならんや。一昔母氏資無く、吾を懷に免す、山川懸絶、眷憐奈何ぞや。有る所を以て無き所を想ふに足る。吾が趾履渉する所、目感觸する所、爺に歸りて告ぐる無し。昔母氏風藻の言、王父の前に報じ、一篇三たび懿孝を致すと奈何ぞや。無き所を以て有る所を察するに足る。蓋し淵を爲すに於て、晉の李密恩愛極りて、文有り陳情の表と稱し金石響あり。然らば乃ち情の密なる所、文も亦た臻る所有るか、否か。母氏此の病起たず、年を踰えて卒す。其の昆大津知至、白季執の遺玉井老媪、駢に皇邦の學に通ず。一二刪して文益々精なりと云ふ。是れを序と爲す。

温海の記

池田喜代井女

うかりし世のさわぎにも、ひま行駒のとゞまらで、いつしかあづさゆみ春の頃より、足引のやまひにさへなやみて、くすし何くれと心をつくしにたれば、いさゝかはおこたりぬれど、猶たひらかにさわやぎたるにもあらざれば、古さとの家とじ心ぐるしがりて、温海の出湯こそしるしおほからめときこゆれば、いかでともなひまゐらせんとせちに宣ふにぞ、さらばとて思ひたちぬ。頓さふのことにしあれば、旅の調度大かたに取まかなひつゝ、葉月のやうか東雲の頃かごをいづ。日を経んほどは、僅つかなれど、旅としなればさすがに名残りをしうおぼえて。

いまはとて野邊の草葉は分ねどもまだきにぬるゝたびのころも手。

霧こめたる野路をわくるた手奥ごしのすたれ打かゝげて見出せば、遠山より朝日のきら／＼とさし出たるは、さながらるにかけるさまなり。昨日は打時雨つゝ、かみさへひゞきておど

ろくしうおぼえけるを、かくまばゆきまで日影照そひ、をちこちの野山ひとめに見渡し
 たるさま、いひしらすをかしう、けふのかご出のさちありけるを、ひとくともて歡びぬ。
 ことしは國つ君他たし國に移らせ給ふべかりしを、再この御くにをしらせ給ふべきよし、公
 よりおほせごと下され給へれば、いまはたあらたに御國を賜はりし心ちして、野山の詠め
 も一しほまさるおもひなむせらるゝ。小田の面たひらかにして目の及ぶかぎり見渡すに、
 ことくく實りて口なし色にみゆ。

とみ草のかくばかりなる豊國をひとのたからとなすべかりしを。

と幾そ度もかしらをめぐらしつゝ、猶行て夏わたりてふ茶屋に着ぬ。ひとくは歩行より
 物したまひしかごもとくつき給ひて、いとおそかりしぞなれぬたごしに打ゆられ心らあや
 まりもやし給ひしなご心ぐるしう待侘つるに、さまでもおほせぬことの嬉しさよ、なごの
 給ふもかしこし。かれいひたうべなごしつゝ前栽を見るに、庭のさまやり水石のたゝすま
 ひなんご、かゝるひなにはやうかはり都めきたり。はるかにすぐせ山霧の晴間より見えた
 るは、おもはぬ空に「なごよめるもかくやとおぼゆ。あとより同じともがらの女ごち、い

はけなきものなど打つれて來たり。こもゆあみにとて行ならんかし。駒の鈴の音にぎく
 しうきこゆ。一本たこしこしもおほはれたるこゝちしてなやましきやうなれば爰より歩行より物す。

廿とせばかりむかし行かひたりし道にしあれば、いとめづらかにみやりてかくへだてなく

おもふごち袖かいつらね旅ごろも日もながかれといのるむまや路。

山路にかゝりてくだりつ茶店のぼりつ矢びき峠に至る。さてんに從者ごもしばしいこふ。さゝ

やかなる泉の有をむすべいと清し、こゝを立出てけはしき山路を越ゆくほごに、木高き
 梢に栗のゑみたるをめづらしく、とらまくおもへごせんすべなくてあふさまもるを、久賢
 君さゝやかなる石かいとりてなげうちたまへば、この實はらく落たるを、童心ちしてあ
 らそひ拾ふ。又山路を行に三瀬村遠く見ゆ。山川の水清くながれ底はみなさゞれ石にて水の
 音なひ岩間にこもりてきこゆ。一丈ばかりの橋うち渡りて行けば、くれ竹の林の中にもが
 菝菝さの神の小社あり、道のほよりほこらまで鳥居もて廊をつくりたらん様なり。そが中
 をかよひ行て初穂たむけをろがみぬ。よはひみそぢよそぢばかりとみゆる女ごち三人りつ
 れ立て、わがともがらに立まじりて物いひかくる聲こわざまはやりかにて言葉づかひもいさ

かことなるにぞ、いづれよりいづこへと、へば、越の國なる新潟にて侍るが羽黒湯殿の御山に詣て歸るさに侍りと答ふ。はるくとおもひたちけりといへば、げに尊とさに身をもいとひ侍らず、わが殿むさしの河越とかに移らせ給ふとて、みななげきに歎きて、わが國の神ほどけはさらなり、このふたつの御山にいのりしかば、去月のなかば其事やみて末長岡にすませ給ふべきに成りにしかば、みうち人はさらにもいはず、おのれらさへによみち歸りし心ちし侍れば、まづそのよろこびをまをさんどてまうで侍りぬと語るに、まめやかなる心ざしのふかきにめで、何くれと打かたらひつゝ行に、ほごなく三瀬につきぬ、爰はむまや路なれば、大路もひろく家どもたちつらなりて、むねくしきもおほくみゆ、茶屋にいりてしばしやすらひ、ひるけなごどりした、むるに、午の時過る頃になりぬべし。立いでて笠どり山にかゝる。濱風はげしうて、きたるかさもかたぶくまでなり、むべこそ名づけし山ならんかし。のぼりゆけば、ひと目に海原をのぞみ、はるかにあを島はまよびきのごとく見ゆ。磯邊は小山ばかりなる岩たちそびえ、また、ひらかにあや薙敷たらんやうなるもあり。しら浪のうちよするさまは畫の工の筆にもおよびがたからめ、など

ひとく語りあふ。こしかたを見かへれば、月の山をはじめひんがしなる山々數しらす、麓のさをちこちのやまのあはひくみにゆるさまいひしらすをかし。けはしき山のこし、のぼり下りてゆきめぐるに、和田津海おきには眞帆かけたる舟どもはるかに見え、なぎさには波うちよする岩の上に、かもめてふ鳥の飛かふ、中にはしの紅なるを見て、廿とせばかりむかしうなるはなりの頃、こは都鳥ならめといひしを、母君はおよすげたることないひそ、そのたまひけることなごすゝろにおもひ出て、

またこんど契りしことは昔にて歸らぬみちにいりし君はも。

かもめあまたいみじうなく、

なき人をこふるこゝろやかよひけむれある鳥もおちかへりなく。

かくばかり心のどけき旅ぢながら袖ぞ露けかりける。めしぐしたる老婆は、おのれ幾度もこの海道は見なれたれば珍しからず、浦わの詠めも山の紅葉もそむけて過給へ、とひたいそぎにもよほさるゝもいとにくしや。猶浦路をたざるに、岩ほのうへたひらかに、よたけいつたけもあらんかど見えてひろらかなる有、こは義經の馬のり場てふ所なりとぞ、をさ

なきときこゝを見しに、邊りの里人の來て昔語をしつゝ、是見給へ駒のひづめの跡いまに
うせさむらはす、なごときをしへしが、げによくみればさもありぬべき形なりしを覺え
しに、いまはみないし工みのきりとりて跡かたもなし。空ごともあれさるすぢは、萬代
のちまでもつたへおかまほしきことなるに、こゝろなき賤がわざかな。げにやさるやん
ごとなき君の、八重の雲路へだてたるをちまできまよひ、朝にけに、

よるなみのかゝるなきさにぬれ衣をほさできすらふひとをしそ思ふ。

かゝることなごさらにおもひつゞけぬるもをかし。小鳩てふさとの山峰より峠まで海の只
中にさしいでたるいはほの道のかたへにやすらひ所ある、むかし見しには、岩ほにかたご
りて建たれば、雨風をもふせぐに便りよく、戸ざさすともうれひなきやうなり。かたはら
の岩のくぼみたる所に、天照太神をいはひ置きまつりしが、さいつ頃高汐よりて、岩打く
づれてのち、ひきはなちて新たに作りかへたりとぞ。さればなべての家にことならず、い
ときようなし。こゝを出てまた山のこしをめぐるに、おなじやうにさし出たる浦邊の、こ
もたへなる詠にしあれば、ひとびとやすらひ海原を見わたすに、すぐせ山所をかへてつく

りたらんやうなるは、おぼつかなきまで見ゆ。

わたつ海に神やおきけむ宿世山ふもごをあらふ奥津しらなみ。

猶山路をのぼるにいみじうつかれて、心のみいそがるれど、人々にははるかにおくれつる
を、兄君たすけ給ひて、さないそぎそ、やみさらばひ給ひしをいかでか人並に物し給はん
や、のどかにはこび給へ、とせちにいたはり給へば、さらばとてこゝにもやすらひて、四
方を見れば山の氣はひみどりにして、雲のたな引たるさま、

うらくと春にまされる夕日かげ花かどまがふ峯のしら雲。

とびや坂てふはいみじうけはしくて、すぐにのほらばあとなる人のかしらふむべきやうな
らんを、ゆん手めてに幾まがりかまがりつゝのぼるに、からうじてやゝいたゞきにいたる、
みなあせおしぬぐひしばしいこひぬ。こゝよりつゞらわりなるをくだるに、生繁りたる木
の間より山河のしろうみゆるを、ゆんでにおり、めてへ下りて見おろせば、賤が板屋軒を
かさね川に添てみゆるぞゑにかけるやうなる。はじめてみたる人は、こゝぞはや温海の里
ならずや、とたどるもうべなり。下りくゞて五十川なる橋のもとにいたりぬ。川はいと清

らに水瀬早う岩にせかれて右手の海に流れ入音おどろくし。かは上はるかに見やれば、幾千疋の布ひきはへたるやうに、しろうほそなりてみゆるもいひしらすをかし。そなたのかたに高くそびえたる芝山の、うすみどりなる峯の三重にかさなりたるは繪に寫したる富士にも似たり。すべて山も水もいひしらす目もあやなり。橋打渡りて立ならびたるさてんに入て、^{從者}すさども酒うちのみ、もちいひ給へなどするほど、みないこふ。こどしかりし山越えにいたうつかれければ、爰よりまたのりぬ。歩行より物せし人々はこよなうおくれて言葉かへすべきやうもあらねば、籬うちかゝげて見出すに、岩根丘のごとなるもあり。またさらでも高くそびえたるも、數かずいくつといふ限りしられず。しら浪のうちよするに目路のおよばぬまで海原を見渡し、夕日なゝめにかたぶきまばゆきまで汐路はるけくにほふさま、いにしへ源平のあらそひに、あづまの武士扇のまごにゆみ射たりけん、檀の浦の氣しきもかゝりしや、なごおもひやりつゝながめあかぬに、いでやこのかたばかりをもうつして父君に見せ奉らばや、と筆とりいでてみれど、いかにせん山家のあら男がかきもてゆけば、こしは右手左手に打ふれて、火をけもまろびつべきやうなれば、ならはぬわざ

はいかでかはおよぶべき、一とせ石井氏のみやこにのぼり給ひし折、所々の詠めをいみじうおかしく物し給ひしは、みるがごとなりしがとおもへどかひなし、浦邊々々をながめつゝ、濱の温海てふ驛にいたりぬ、^(本一夜の調度などは船路をまはしたるがこゝにつきたりけるを、又馬におほせなごするにかしましり)こゝにもまた馬人どもにあらたまり^(本こしかくをのこども、こゝより有)いでて、さきのはみなかへりぬ、わがどもがらの外にも興あまた並びあるを、おもきかろきはかりてあらそひ昇くもこごわりになん、わらは、月ごろの病に瘦さらばひたれば、かろしどてこよなうよろこび侍るにぞ、おもはぬことにて人によろこばるることかな、とひとりゑまるゝ。よばろどもはけふは湯元のまつりなれば、とく行て相撲を見ばやといひしろひて、たみたる聲をかけつゝいそぎはしる、翅やつきたるとあやしまる。山の麓ゆきめぐりて申の時過るころ出湯の里に着ぬ。九日に行べしとかねて消息しおきたるに、むさしなる河越のみうち人、御國移しのため春の頃よりわが御國にうつり居たりしかど、其事止みにしかば、明日なん古郷に出立よし、越路を經、ときこゆるにぞ、おなじちまたをゆきなば心おかるゝこともや、と俄にもせしかば、宿のあるじ

もおもひまうけざれば、あわてふためき、障子さしかへ、むしろ敷かへなどするにや、ありていりぬ。おくれし人々もやがて着給へば、打つれてゆあみするに、終日のつかれいづちいにけんとおもふばかりなり。ほどなくかれいひ出しつるを、うちまとゐしてたうべつゝゑひたるものゝごと打ふしぬ。明る朝まだきに湯あみし、其邊り見渡せば山もてつゝみたるやうにて、幾重ともしれぬ木すゑそこはかどなく色づきたるに、薄霧立こめたり。舎毎に湯あみするおとかまびすしう聞ゆ。すべてこの里に入つごひたる人八百人やままり有とさゝしが、實にさも有ぬべし。此家にも間毎に居つごひて、袖の浦人越の國などたゞふすまのみ關なりけり。月ごろの心こりに、越の國人ときけば、こゝろもどなくて、いかさまなる者ぞ、と従者どもにとへば、おもひきや昨日道にて逢たる女どもならんとは、いかなるえにしにか有けん、朝夕にとひ来て、おのがくにのさま、よの常の物語をも口疾ごにかたれば、みなくゝめづらしがりきようじて、つれくゝをなぐさめぬ。三日四日も立ぬればいど日頃になりたる心ちせられて、父君やいかに、をさなきものはむつがりてやなど心もどなくおぼゆるにぞ、便りつけててふ女のもとまで、

かりそめの旅寐ながらも思ひやる小萩がもとに露むすぶやと。

四五日ありて返しあり、

宮城野の小萩が露をふせぐかなおほふ尾花の袖はぬるとも。

いとあはれにも又うれし、久賢君はみやびわさは元より好み給ふ物から、あしの八重ぶきいどなくて物し給はざれど、終日まごのもとに在てたけの紅葉の色そひたるを

山姫は木々のにしきを織そめてひと日ふた日に色まさるらん。

と口ずさみ給ひつゝ美酒給たうべなどし給ふ、折からかの越後ぞし打つれて来て、このほどふしぎのえにしにて、かしこくもふかき御恵みをこそかうむりつれ、明日は古郷に歸り侍れば、かしこまりまをさんさて、といふにぞ、いとくゝほいなう名残をしさ限りなし、なごてさは俄には物し給ふや、と人々をしみきこゆ。かたへに反古どもとりちらしあるを見て、それ一ひら給ひてんや、古さとのつとにせまくほしければ、とこふに打おごろき、あなかたはらいたや、といそぎ引隠さんとする手にすがり、何をわきまへしるべきにしも侍らねど、御心ざしのふかきを年経て後のおもひでにせばやとおもふにと、あながちにこふ

を、久賢君さばかりいふをさのみいなみ給はんことかは、この給ふにぞ、せんすべなくてあやしきかみに、

わかれつゝ君が行くどもをり／＼はおもひ出羽の友なわすれそ。

立かへり又も逢見ん君ならばあすのわかれもをしまざらまし。

また萬年糖てふくだ物にそへて、

萬代も君は榮えよあづさゆみ八重の汐路をたちへだつとも。

高力氏の君たちやどりたまへる家もほごなかりければ、日毎に行かひむつび語ふ。兼てみまほしうおもひたる紅葉が岡に、君俊ぬし道しるべせんと聞え給ふに、いどうれしうつれだちてゆく。小田の中道しばしゆけば、つゞらるりなる細道わけ登り、ほごなくたひらかなるに出たり。こゝをなん紅葉の岡がナリとはいふとぞ、ふりさけ見れば子丑の方まで打ちかはへたる山のあはひより白うみゆるはまがきが瀧なりとぞ、めての方には、山のそがひのゆき違ひたる間よりは、青うな原天津空とひとしきさま、筆の工みの書きわけたるやうなり。山々の木々の梢もさまことなり、苔の上にあやむしろ敷渡し、ひと／＼まどゐして、わり

籠さゞえなごどうでて、み酒くみかはす、めし具したる女ども、三筋の糸かきならし、あだめきたるをのこごも、手うち足ふみをざるさま、ひなびたれどさすがにきようなきにしもあらず。故固大人もとのうしのつくり給へる石ふみを見ばや、とそこかこゝかともむれど跡だになし。人にとへば三とせ四とせさきに何人かうしなへるにや、といふにぞむねつぶれて、いで湯もるあつみのたけは、としのはに神さびまさり、ふもどには木立繁りて、青垣の立しめぐれば、よつの時いつはあれども、紅葉する秋をあはれど、みなひとの來つゝぞ遊ぶ、しかゆるゑに固の大人も、この里にきませる毎に、こゝにしも美酒みづくみかはし、錦なすよもの紅葉に、言の葉の色をくらべつ、空蟬のうき世をへだて、たつ霧のまがきが瀧にむら肝のこゝろをあらひ、とにかくながめにあかで、百しほや千しほもふかき、くれなゐのもみちがをかど、石ふみに名をしとどめて、今もかも有としきけば、みまほしみ野路の露わけ、足引の山こえ來つゝ、尋れどいづちいにけむ、しら雪の跡はかもなし、真木ならば年經しなべに、露霜にくちやはてしと、おもひつゝありもしなんを、千代かけて朽せぬ石の、かくのごとごなりだになき、ことこのあやしき。

名にしおふもみぢが岡の石ぶみをおもかげにだに見ぬぞ悲しき。

一四

木の實みきなどたうべつゝみめぐらすに、まだしき紅葉の色えならずをかしきに、父君にかしづきまつりて見ましかばいかながめや増りぬらんと、とにつけかくにつけて家路しのぼるゝ折しも、雲井に初かりの音づるゝに、いざや形ばかりをもうつしてたよりについでむと、旅硯どうでて、しごろもごろに物しぬ、秋の空のさだめなきに俄に打曇る。時雨れぬ先にといそがす程に、はやふりいでければ我や先ひともおくれじ、とあわてつゝやごりに歸りぬ。相しりてける人の明日なん歸ると告げればかの繪にそへて、

見せばやなもみぢが岡の初しほは千しほにまさる山のこすゑを。

とて父君におくりぬ。日ならず御返しあり、

音にきく紅葉が岡の初しほをふでのあやにてけふみつるかな。

あくる日、又けふは空も晴れぬ、平清水にとてもよほし給へばやがてともなはれ行ぬ。ひんがしの方へいさゝかゆけば山寺なり。門べのかたへに早田村の孝子慶玉の石ぶみあり。有難き心ばへをあはれに覺えてしばしばをろがみて、

うづもれぬ珠の光りも君が代は敷分やぶしわかねばあらはれにけり。

此所の里人等いつしか鏡塚と名づけぬるを、越の國なるうたよみ歌人榮重こゝに來りし時、こよなうめでて歌にも數多詠み、わざ唄にも作りたるよし、其唄は、溫海嶽なる、ふもこの寺に、鏡塚とて、建てたるつかは、人の心のかゞみ塚—とうたふをきゝて、

かゞみとも見よと建たる塚ながらナレシ向ふもやさし數ならぬ身は。

この石ぶみの文字は神原何がしの書たり。文のあやはわが父君こゝろを籠てつくり給ひ、おもてには慶玉が形ち世に有りし時につゆたがはず、みづからゑがき給ひて、畫の工に寫させ給ひしになん有りける。さればいとゞあはれにかしこみて打守らる、寺に入りて見ればいと廣らかにきよらなり。佛の御まへふしをろがみ書院にいりて見れば、庭はおのづからなる山にて、おくは嶽までもつゞきたらん吳竹のはやしいとふかう、前には泉清らにながれ入て、浮世のあかも洗ふべくいとくしづかなり。あかぬ物からやをら立出てしばく行くに、杉の木立ありて、木のもとよりわきいづる清水を、方三さかばかりの石の箱にたゝへてそのあふるゝは湯の里にながれて家々のかけひにせき入るなりけり。平らかなる道

一五

のほごりよりわき出る泉なれば平清水とは名付しならん。ゆんでは山川水瀬早うながる。其川に添うていさゝかなる坂路をのぼり行けば平清水村といふ、あやしげなる家ごもこなたかなたおのがさまさまに打ちむけたるが、五ツ六ツもあり。中にいさゝか坊めきたるに入りてみれば、菴などもけしうはあらず、堂上などきら／＼しうはあらねど不動尊すゑ奉り、ふるびたれど經づくゑに佛の俱何くれとそなへ有れど、ちりもはらはす。みなみは打ちらけて、まちかくむかふ山をさながら庭に見なして、生茂りたるみどりの木立ところ／＼薄紅葉したり。其たらんやうにみゆるもをかし。ひんがしのかたは、木立ことさらに植ゑ並て、岩間よりながれいづるやり水よし有さまにて、水の上にかけて作りになしたるあづま屋あり、昔は涼みの亭などにしなしたらめど、みなやれかたぶきて柴薪やうのものおし入てあり。くりやのかたにめぐりて見れば、ひらゑろりのほごりに、栗の實無目能めなしかたまに入ておほくあるを、高力の女の小君こよなうめでゆかしかるを、八重女君あなかまやあるじのゆるさぬをせいし給ふほごに、三十字ばかりの女のみにくからぬが、うつは物に栗の實うづ高く盛てもて出ぬ。小君はさらなり皆みなもてはやす。此女何くれとあるじぶりの

いとなれたるさま、世をさけたる墨染には似げなう見ゆるに、花山にはあらで是は紅葉山の僧都なれどひとに語るなごもまひをもせで世にはごかりもなきふるまひこそうとましかれどさゝやきしを、後に聞けば優婆塞のながれを汲めば妻子もてるは佛もゆるし給ふとか。このもごをも得しらで口さがなきことをいひたりきと心のうちにはぢらはれぬ。十五日は此里に月見のえんとてもちいひくだものうつは物にいれてもてありく。夜になりてをどりてふわざをするごととよめきあへる。たち出て物見すれば、皆清らに花やかなるひとへ衣着つゝ、あふぎ打ならしいはひの言の葉をのばへてたちまふさまいと／＼きようあり。そをみんとて立つごへるひとのかしらはいくそばくならんちまたはきりをたつべきさまもあらじと見ゆ。ごもし火星のごとくかゞやき、月はくまなく照わたり、ひるよりもなほ明かければ、いごごにぎはしさもまさりぬ。亥の時ばかりに其事もやみぬ。更行まゝに月は澄のぼり、山の梢を照せるは落る紅葉の數を見よごか、實に山里ならではかゝるをかき月はいかで見るとべきや。限りなうめづらしきにつけても、父君やをさなきものはいかにや、ご例のおもひやらるゝ、はたさりぬる七月十六日チ云十六夜の月のいみじう明かりしに、わが

君御莊のみさうもとのまゝに給はり給ひしとて、早おひの御使奥津うち江都より着給ひしかば、世にありとある人よろこびあへりて、足をそらになしてはせちがふに、大路はさながら眞ひるのごとなりしが、なごおもひ出つゞけらる。もしやむ事なくてかしこのくに、移たらしましかばいかに故郷戀しう今宵の月も涙にくもらましもものを。

かくばかり光さやけぎ月影をこゝろくまなくみるぞ嬉しき。

中の九日には山本氏のせうとの君とむらひ給ひて、わが父君をはじめいづこにてもたひらかにおはするよししくはしうきこえ給ふにぞおち居ぬる。兄せうとのきみ君はこゝらの道ふみ來給へどいさゝかもこうじ給はず、明日は關の辨才天に詣でばや、とそゝのかし給ふ。いどうれしう俄に用意しつゝとらの刻ばかりに出たつ。山河にそひてしのすゝきわけ行くに、小夜嵐身にしみて雪氣の空のやうなり。月は中天に澄登り、晝かと思ふばかりなり。山さへ野さへいとゞをかしう見渡さるゝに、あゆむともおぼえず海と川との境、たな橋掛たるをわたり、岩ほの山を切ぬきて道とせるにいたれば、ゆほ打開けて有ひかなるにしら浪のとよめきて打よするに、さやけき月のうつりたるさまは、晝にかきたるならではみしこともあらねばし

打ながめて、

しら浪のよるのながめも飽なくに月もめでてや影宿る一本すらむ。

猶汐路をたどりゆけば、ほがらかに明わたる山より日も出て影まばゆきさまなれば、

朝日かげにはふ浦わのしら浪を筆のあやにもいかでうつさむ。

よべ寒かりし風もいつしか夏のたちかへりたるとおぼゆるばかりなり。わたつ海はふかみどりに八重の汐路はるけく見えわたり、なごさには千々の岩いく重もかさなり、さゞ浪よするなごたくひもあらず。

ながめあかぬ浦路の山をこゆるぎのいそぐとすれど行ぞわづらふ。

此山をこゆれば住吉の神をあがめたる御社あるにぞ、こゝをすみよし坂といふといへば、

住吉のまつてふことをたのみつゝさかしき山も安らナルベシにぞゆ。

いみじうそびえたるいはほのやま、海にさし出たるに、さゝやかなるほこらありて、松生並てふりたるさまいはんかたなり。抱た瘡ぢの神をあがめしなりと一本に十三字なしか、ななきなよよししと一本に九字なしこゝより海のおも見渡せばコノ間一本ニ辨才天の御やしろあけの珠がきはるかにななきなよよししと一本に九字なし海の中に

さしいでて見ゆるさまきしにも猶まさりて、言の葉にも筆にもおよびがたし。坂をおりてほどなく念珠が關村にいたる關守の家は小高き所なり。岩根にまごゐりて見渡せば、越のやまは手にもとるやうにみえ、國の境とし思へばすゞろに心ばそきやうにて、

名のみにてすゑ置關もふる里をしのぶこゝろはとゞめやはする。

そのほとりにくだかけのなくをきゝて、

はかるべき人もやあると鷄の音にこゝろおくらんねすがせきもり。

他し國としおもへばにや、浦路も山もことなる心ちする。しるべ一本ニ人トアリコノ方にしあれば所の長なる佐藤某のもとにたちよりけるに、あるじの夫婦はものにまかりて老たる家刀自とをのわらはとあるじしてけり。いとひろらかなるいへにて萬づきよらなり。されどかゝる海邊のながめも見あきてや、庭はたゞ山もてかこひたるやうに空さへ見えぬさまなり。弓矢鉾なんぞ掛並べたるはものゝふもやさしきまでなり。まづ社に詣でかへさにと契りて立ちいづ。こゝ屋村をへてみやしろにわたるべき汀に至れば、そこよりいはほつゞきに打ちわたる。むかし來し時には舟にて渡りしをいときようある事におもひしが、いまはかちに

て渡る。實に淵は瀬とかはりしにむねつぶれておぼゆ。岩のうへに建たる鳥居をうちすぎ、わたりくゞて社の前にいたる。きらくゞしう清らに作り立たり。屋根はからかねもてふきなしたれば、汐風にさびてみどりの色となりぬ。よろづ物ふりてたうときさまなり。

玉の緒のたえぬかぎりはひとすぢにいへのさかえを祈りこそすれ。

神垣のほとりに松ふた本あり。

松がえも神のめぐみの深みどり幾世經ぬらむ關のみやじま。

千々の岩間あさりめぐりて數多の貝をひろふなかに、あはびてふ貝を得つればよろこびて、祈るかひありといひあへり。松のもとより陸のかたを見わたせば大泉と越の國とひとめにみゆるさま中々にいふよしもあらず。こし路のかたにはこを建たらんやうなる岩のはるかみゆるはねやのほこだてといふとぞ、出羽のかたにはくれ壺の立岩とておなじやうに見ゆ。されどひなびたる名こそをしけれ。しばし打ながめてあかぬ物からをさの家に歸れば、種々のまうけしつゝ、何くれと心ふかくあるじせる物から、いへあるじの居らぬぞいと本意なくおぼえて、

尋來てうらわの浪のたちよれどみるめもからぬことぞ侘しき。

わかれを告ておなじ浦路をかへるに、爰は早田わきたてふ里なりといふに、そここゝいそ田かり初めたりければ

名にしおふわさ田のをしね實りてやまだきに田子のかり初ぬらん。

父君より次手あらば慶玉がいへの跡尋ねてこの給はせしかば、一本に「尋れよといひおこ行かふ せたまへれば」とあり此方人々にとへごもしりつといふものあらねば、ほいなうすぐるに、あやしげなるいへの前に、むさげなる小筵打敷き、九十九髪ふりみだしたる老婆の、幼き兒どもに小螺といふ貝を、針もてつらぬき出してたうべさせぬれば、ことをもしりつらんとおもひてたづねさするに、そはおのれよくしりて侍り、父母につかへしことはひとのまねびおよぶべきにも侍らず、としてかくしてごまやかに語る。いでそのいへの跡はとへば、その孝なりしことはおほやけまで聞えあがりて、絶にし跡にいまは家あるじもごめさせ給ひ、いへさへあらたに造らしめ給ふぞかし、かうもありがたきためしになん、その家はかしこに侍りと、をよびさしてしめす。いと嬉しさにいさゝかづけものなどして立わかる。したどみてふ貝

は古へよりうたにもよみ、また萬づのこの葉を集めたる書にも机の嶋の小したどみ」ともよめり、爰には田にしに似たればつぶかひとのみいふめりと、過しころ父君のさとし給ひしことなどおもひ出らるゝ、花すゝきあまたゝてる中に、萩の花のおくれて咲るもらうたげなり、岸のしまといふはわきてあかぬながめにしあれば、時を移すほどに秋の日かげいとほやくも

暮ゆかばきしの小松に舟とめて汐路はるけき月を見てまし。

と歸路をたどるに花やかなる衣きなしたるをごめ等みたりよたり、またをのこらもうちまじりて、こゝらかさなりたる岩のうへにむれ居て、釣たるゝさまなどみゆ。いづこのひとにかと見つゝ行くにちかづくまにまによく見れば、湯あみのまゝにてさだすぎたれど一本に「さたり定論の時期 過ぎたることなり」ともゆかしき心ちして、つかれたる足をもいとほす走りゆきて、かたみに一日のよろこびなどのばへて、けふの辨天詣のことなどしばし語ふほど、はや日はいりかたに成にければ、いざやとて歸る。浦わのけしきのなほあかねば、幾度もかへりみらるゝ山の梢の色まさる

をあふぎ、よろづに心残してたそがれの頃ゆもどに歸り着ぬ。けふはこゝらの山路眞砂路をふみて、いみじうつかれ侍りて、やがてゆに入らばやと衣ぬぎなどするにひとくたちさわぐに何ごとにやとうちおどろきてとへば、俱しつる老婆がこのほごいさゝか心ちそこなひてありしが、俄におもりていみじうくるしみ息もたゆべきなりとて立さわぐに、いとくむねつぶれてゆきてみるに、さなきだにあらゝかなりしつくも髪ふりみだし、老の浪幾重ともなく打よせまゆうちひそめ、はをくひしめたるさまおそろしげにて、よりもつきがたき心ちせらる、いかがはせんとあわてまごへごせんすべもあらず。相しれりける薬師くすりしほごちかく宿り居るよしきけばいそぎまねぐに、やがて來りてとく薬をあたへぬれば、まづおこたりぬるものから、なほ頓たふにさわぐべうもあらざれば、明る日小荷駄に打のせびとを添へて歸しぬ。打おどろきたるうへに何くれと心をつかひしげにや、われさへこゝち例ならずなりて、打籠りてのみ居ぬ。とかくするほどに、日かすもとぢめになりぬ。末の九日には雨は晴間なく降れど、宿のあるじ明日はかならずはれ侍らんといふにぞ、さらば心がまへすべしとて、まづ八重女のもとにいとままうさんとて行きて頓たふて歸りてみれば、

宿のあるじむまのはなむけの祝ひとてくさくまうけしつゝ、あるじやから、水しめまでいでて酒くみかはし、みなゑひしれてたみたる聲して「湯海はづれの紅葉が岡にくになご手拍子とりて唄ふに、ひとくもきようじ給へり。六日なのかまへまではなやみがちにのみありしを、ことなうさわやぎたれば、ともなひし甲斐ありとて歡給ふ。宿のあるじさへどもにさゝめきあへりぬ。丑みつ過る頃ならん空はよくはれぬ、とくおき給へとおどろかすにぞ、頓て調度とりをさめ萬づと、のひつれど、まだよふかきにや馬もよぼろも出来いでこざれば、又湯に入てあくまであむれど猶名残のをしさに、「あかぬ湯をいへづとにせんよしもがなみつがひとつを割てなりとも」といへば、あなをさな、慾もほごこそあれ、とひとくどよみわらひ給ふ、やゝしのゝめになりぬ、ともよほすにぞ立いづる、あるじやからつごひて別ををしむにいまはとて、

古さをいそぐ物からしかすがにのこるや旅のこゝろなるらん。

此里をまもり給ふ地藏尊の御堂は、いとさゝやかなれどけしうはあらで、いはがき小高くしてすゑ奉るが、けさしもみどびら開きてみあかしきらめき、たうとげなれば、たちより

てをろがみまつり、牛小屋おほ木のまへを出て山河をゆんでに見つゝしばしゆけば、ほごなく濱の温海にいたりぬ。時雨もようしぬとてしばしやすらふに、其家のかたはらに杜若らうたげに咲けるは、めなれずをかしようたゞに過がたくて、

手折るとも人などがめそあるじよりゆるし色にぞ咲る花ゆるる。

しら浪の名はたゞじとみづから折てこしの内にさしたるぞ、わが身ながらもをさなしや、こゝをいづれば西風はげしう吹て汐霧は雪吹かどまがふ。五百へなみとゞろきて、よびかはすこゑもきこえあへず。山のそがひに常盤の松の生並たる中に、をちこち色づきたる梢などもみゆるあはひより、瀧のしろう岩にくだけて、三十よそ筋にわかれて落るさまいとをかしよう見ゆるに、

たちよりて誰かみざらんくれ羽鳥あやにみだるゝ瀧のしらいと。

暮つばに至る、百尋ばかりの高き立岩さながら山にことならで、いたゞきには大木生繁り、ふもとのすこし平らかなる所にあけの玉垣ゆひめぐらし社あり。いづれの御神をかいはいまつりし、浪の音山にとよみて沖のかまめの聲物すごう聞ゆるもいとあはれなり。

しら浪の聲うちそへてなく鳥をこの浦人やいねがてにきく。

打よする浪のうねくく白う見ゆるは、卵の花にしもまさりて、なごひとびといひければ、さけばちり散ると見しまに立歸るなみの花こそ常盤なりけれ。

空はいよゝあまもよひして温海だけのかたより墨すりながしたらんやうに雲おほひ、天津風いみじう吹まさり、龍やいづべきなごいひあへるにぞ、おそろしくて鳩といへる里の尼の庵にしばし入てやすらふ物から、猶やみぬべくもあらずとてまた昇出す、此ほど記し、反古どもを見ばやとおもふに雨はいみじう降來ぬ。浪はいよゝたかうよせてよぼろどもがあしもしごろになりて、こしはゆりにゆられて物も覺えず。夢の心ちして漸三瀬に着ぬ。米をひさぐ家にやどりたるがこの家のあるじもおなじやうに湯あみせしが、やごりは同じその家なりければ、朝夕にしたしみ其子共等をもふかく哀み給ひしかばいどうれしとおもふさまにて」一本に「其子共の病になやみたりしをあれ君のふか歸らせ給はん折はかならず立よらせ給へと、ぬもごろに契りしかど、はたさしもおもひがけざりしが、ゆくりなくやどりぬるもさすがにえにしや有けむ、いみじうよろこびて何くれとまうけす。頓がて美酒どうで、

かれないひすゝめなどよろづにまめやかなれどみなひなびまづしげにおぼゆれど、かの五條の若菜のあへ物にもまさりてうれしう、みなひらゐりのほとりにまどろし給うべつゝ、ぬれたる衣などほすもあり。日もみじかければとて別れをつけてたち出づ。山路にかゝりて見渡せば、木々の梢は廿日あまりのほどにこよなう染まさりてめもあやに見ゆ。片貝中山は紅葉の名どころなりときゝしが、實にから紅に染たる楓のおほかるを一枝だにも手折て父君にみせ奉らばやと、

山守よけふかへるでの唐にしきをるともゆるせ見ぬ人のため。

わきて色こきを折てよとすさごもにいへば、爰かしこより折もて來るに、こしのうちはごころせくてなほ外にもゝれいづるを物ぐるはしうやみゆらん、

人とはゞこたへむ物をふるさに紅葉のにしき着つゝかへると。

ひとりゑまるゝもをこなり。家にては父君をはじめをさなきものなどやいかに待侘ぬらんとおもひやりて、

松虫の聲をゆかしみ露わけてかへる家路のいそがるゝかな。

夏渡りよりひとくゝに先だちてうき嬉しきをはや語らひまつらばやといそがせつるにぞ、申の刻ばかりに家なる父君の御もとに歸りつきぬ。

胡蝶日記

白井千代梅著

胡蝶日記叙

伊蘇乃關美、布類幾世爾之母、安散裳與之、紀大人乃遠美那乃手布理仁、物世羅麗多累船
路乃日記盤、玉鉢乃三知行布李能、多羅知彌爾之亭、和田川海能、曾許飛不可幾、心志良
悲乃、阿李之知左那良滿之、左禮盤、更級十六夜那東、櫻木能、都支々々爾生以傳天、菅
乃根能、奈加久世爾徒當者理爾多利、鷓鳴、吾婦乃遠乃御可登與李、敷之滿乃、大和能古
言學乃道以與々飛良氣天、白浪乃、洛爾世越春古須安萬能子可、庚子道乃記、志川者太布
阿麗奈不市女乃、伊香穗乃由支可比奈止盤、加美能三久佐乃、宇末己止多々弊關止裳、者
遲奈可良末之、於保與曾、王可浦安乃大御國盤、足曳乃、山川乃多々春滿悲與李之亭、空
蟬乃、世乃事和斜、人乃古々路左滿、木草乃姿爾至累末天、萬川屋春良介支氣爾也、南萬
志飛奈留、男文字爾、古知多久綴禮留盤、以止都幾奈宇奈徒加志可良努心地曾世羅留々、
遠美那乃手乃、奈太良加仁、書之當類不美古曾、阿者禮左母深宇、躬爾之美亭於保由連、
爰爾古乃國人、藤乃舍迺奴之千代梅遠止免盤、難波鬪、淺香山手習不古呂與里、姿加多知
乃安天爾良宇多久、心左滿毛奈弊天奈良受、小倉乃百首那止盤麓爾天、伊勢、源氏乃物可

多利裳、曾古々々與三於保衣、唐不三左邊、於乃川可良誦之、山口志留宇見衣之可、也々
彌悲末佐李亭盤、裁縫不和散乃以止末爾毛多々不三可幾、歌與武事乎乃三遠、深支窓乃中
乃、春佐美止盤世良禮多里、今止之水無鬪幾乃春衛鬪方、草枕多比彌乃止古爾、以左々村
竹、以左々可物世留、日記遠見留爾、夏山乃木乃志多露爾立奴連、岩波之累瀧乃白糸越結
比、由保悲可那留海原乃浪知遠奈可米多流、古止乃葉乃花、安也爾女都良之字、文乃林、
以止蔭布可九志介利天、咲天布梅乃名爾之於比、安久世奈支筆乃爾保飛爾奈舞安利介留、
宇知日左須、都盤以散志良須、志那左可留鄙二盤、昔與利閑々類妙奈留布美八、以末太見
左流所奈利、末古止也、古乃於保知固大人盤、名高支詞人爾以未曾加里之可波、家乃風吹
門當弊、母奈留玉井刀觀毛、心乃於支亭正之宇、才加之古介禮八、庭乃遠之邊乃奈世留奈
良滿之、志可盤安禮止、天地爾宇氣衣多留、美也飛心乃世耳秀左里世婆、以可亭加波古々
爾到良舞、布美乃名農由惠與之盤、烏羽玉乃、夢乃胡蝶爾身遠加弊天、軒乃志乃婦乃、忍
悲也可爾、有耶無耶乃關路遠多止利、象潟乃蛋能東方也爾屋止利世之事奈止、書安屋那世
留奈禮者奈良舞可之、物可多李女幾天、中々爾興安利天遠可之宇奈舞、古遠見留人達盤、

與久與微味邊、曾乃心遠武可邊亭、夢宇徒々遠盤於毛悲和幾亭與、

天保九可弊利成止之

志久禮降窓乃毛止耳

六十四翁

玄齋

志類之奴

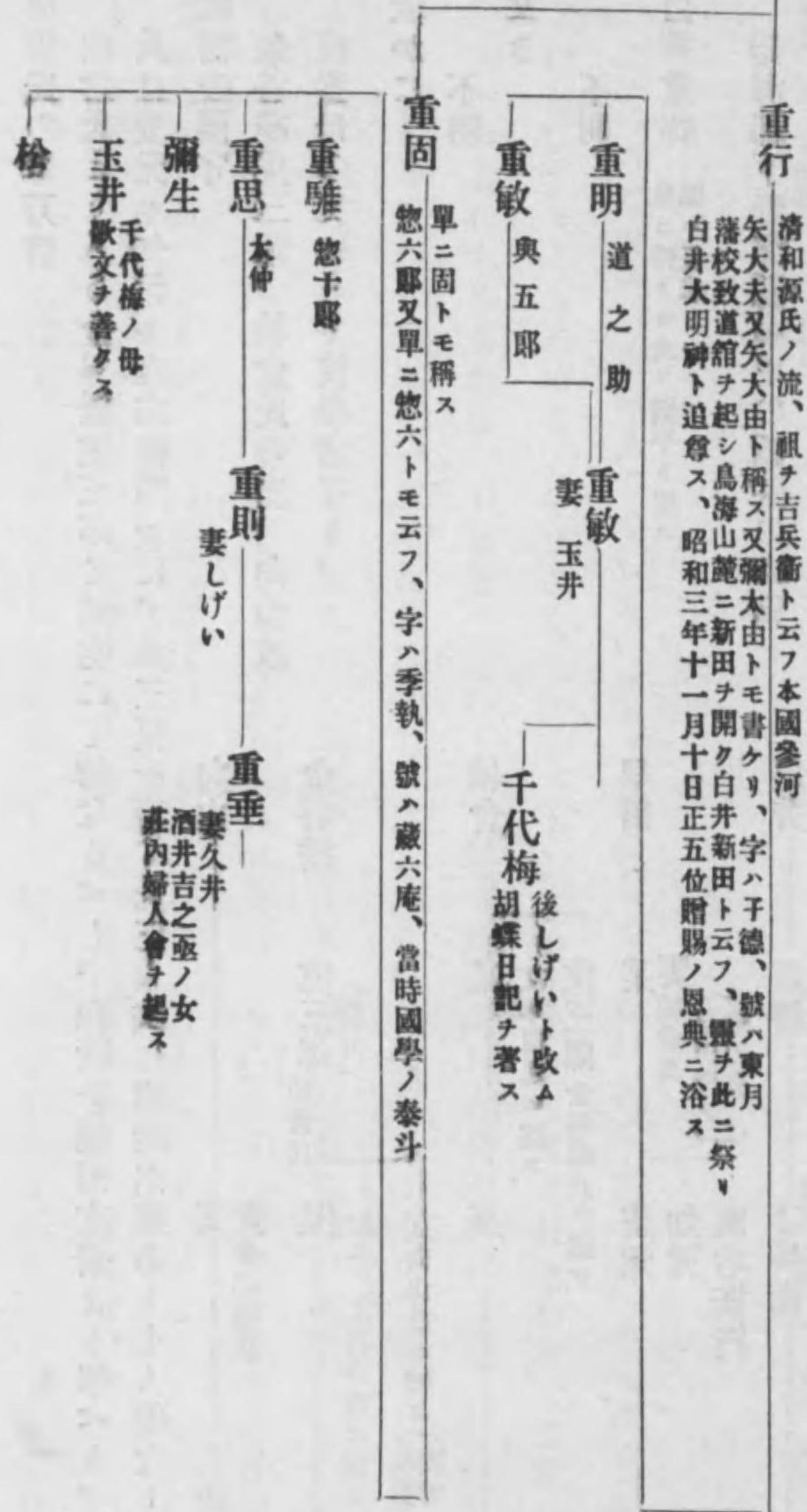
蛇足

此一弓、梅媛手自淨寫、所見贈於予也、形管之美、才藻之艷、可足窺其一斑矣、世稱以為紫清之亞、不亦宜乎、儻使斯人丈夫、專業倭漢典章、從事邦國機務、必有可觀、嗚呼惜哉、予猶發為時之嘆云、

己亥孟夏下浣

玄齋識

白井氏系圖



胡蝶日記中に名の見えたる人

早田氏の母刀自

柏倉氏より入る金谷橋虎三郎と同胞にて姉なるべし、和歌を池田玄齋より學べり。早田氏は安元伯知元仲直右衛門叔にて此三兒を育す此三人共に當時名聲ありし人等なり、

吹浦の關守

金谷橋虎三郎、柏倉氏の出、向山政直養母の父にして漢學者なり、

依かに

不明

文き

不明

白井重勝

早ニ勝トモ云フ彌平ト稱ス 號ハ任卿

飽海郡下野澤隱瀧里の蠶莊の宰司

重田道樹

字ハ千續、諱ハ茂、號ハ鳥嶽 藩醫、書ヲ能クス



胡蝶日記

白井千代梅女

いでや、うつせみの世の人ごとにおのがじ、たのしとするわざとりごりにあらめど、海山のながめばかりこゝろゆくものはあらしかし。されど白雲へだゝるとほきわたりは旅衣おもひ立べき身にしあらねば、只我國つ君のしろしめす境の内なる名所をだに見てしがなど、としごろおもひわたるを、早田氏の母とじ、はらからなる何がしは吹浦の關守りなるをしるべ人にして、かしこのわたりおちなく見めぐりてんどおもひたちぬ、そこにもいかで。なごせちにそゝのかし給ふにぞ、うらすの鳥の飛立ぬべき心ちすれど、母君は人の物いひさがなかる世にさるかるがろ敷わざはいかでかはとゆるし給はねば、げにことわりとはおもふものから、さすがにほいなくてこゝちさへわづらはしうおもほゆれば、打ふしつゝ猶おもふに思ひたへなで、玉かつらかゝる折ならではいつかはとあながちにこひまうせば、さらばかのとじの子むまごともなりてよとの給ふにぞ、いみじう嬉し。かくて水無月末の

五日、袖のうらまでは船路をゆかんとて、みの時近きにふねにのりぬ。やゝこぎいづるほど川もいとひろらに成て、遠近の山は雲のへだてもなう見渡され、日は高うなりつる物から、汀のあしに音づれわたる風のふねにも吹いれて夏もわするゝこゝちす。

川瀬にはまだきに秋やたちぬらんとまふきいるゝ風のすゞしさ。

水草の花清げに咲るは折りもとらまほしけれ。あさ瀬になれば舟子はおりたちて綱手くるしげにひく所も有り。汀に柳芦などむづかしげにおひしげりて空も見えすいといぶせき中をこぎわけつゝゆくに、こゝちもなやましようなりぬ。刀自はよべものしたゝむるなどにていたうふかしつるにとてふし給へば、おのれもより添ひてふす。こゝよりなんもがみ川に成ぬといふにぞかしらもたげぬ。いざり出てやをら見いだすに、水の色眞青をあをにて右のかたには木立もなくたかゝらぬ砂山などあるぞたゞ海ばらにこぎ出たらんやうにて、すくせの山の高ねに横雲棚びきたるさま田子の浦わもかくやあらんなごいひしらへば、黒森坂のべなどのわたりこそここにをかしきながめ成りしを、なご夢にのみ過けんといふ心を唐哥につくりて依かに主の笑ふにぞ、

たのしきはねぬにまさりの波枕もろこしかけてゆめに見つるを。

と刀自のいらへ給へばわれも、

なみまくら結べる夢のたのしきは寝ぬにまさると人はしらすや。

としはまだをさなき人なれば、かゞやかしうもあらでかゝることをもきこえかはしつ。はるゝとゆほひかなる水の面に夕日かゞやきたるは、こがねの波のよするかど見ゆ。千ぶねよる袖のうらのみなどもちかくなりて、日和山なる五重の堂塔一本もそれかあらぬかいとちひさく見ゆるもをかし。

心あらば梶なはやめそゆふばえのあかぬながめも舟ながら見む。

とおもへどほごなくはてゝ出町なる何がしの家にやどりぬ。いで日和山はいと近し暮ぬまにどてたちいづれど、山にのぼればいとくらうなりてさだかにも見渡されず、月夜ならましかばと人々もいふ。星のかげかとおもふまでかすかに火ふたつ三つ沖邊に見ゆるは海士のいさり火にやあらん、みなどの舟にも皆火もしたり。こゝもどに見おろさるゝは舟塲町どか、樓ごとに花ごうろかけ渡し人あまた酒くみかはしてあそぶ、をどこ女のけぢめは

見えねど、扇など持て立まふさまめなれずをかし。風いとすゞしう吹て草村にきほへる虫の音などはたあはれなり。ふもどのかたにきぬたのおど聞えければ、

吹かへす袖のうらかせ身にしめば秋をもまたでころもうつらむ。

やがて歸りぬ。軒ちかき松のこすゑに風さや／＼とふきわたるを旅宿の秋風といふ心をよめと刀自のゝ給ふにぞ、

夕さればいとゞわびしなゆひそめし草のまくらにかよふ秋かせ。

廿六日、空いとよし。依かたぬしよべの題に夢にてかくつくりぬ、けさなんおもへばよくはあらしなどかきて見せ給ふ。をそこ文字なればよくもよみえず、皆わすれぬるぞわろきや、其はしに、

艸まくら露けかる夜も風流士はゆめにぞむすぶたまのここの葉。

たつの時すぐる頃立いでつ。今町といふをかゝれば左は寺小路といふとぞ、名を聞しのぶあま君のみ寺もちかゝらんと思へば、

いかにせん袖の浦波たちよりてみるめをだにもかるよしのなき。

野邊にいづれば、あさけの風いとすゞしうふきて、やゝ穂にいでし初尾花のうちまねぐのみにて千草の花も見えねば

野べはまだ萩も匂はぬ頃なれば旅のころもになにをすらし。

といひつゝやゝ行けば、野ぎくつき草なつかしげに咲て露おもしろう置わたしたり。ぬれたの後は「など刀自は口すさみ給ふ。またなでし兒のいとほかなげに打しをれしを見て、

露ふかきのべにゝほへるなでしこにあはれをかけぬ人はあらしな。

とてすぎぬ。花紅葉の折ならねば山はたゞみどりの松のみぞながめなりける。藤塚、市神などてふ里すぎて小みなどの渡しに出づ。川はいとひろけれど水あさうてさゞなみ打よするもすゞしげなりや、渡しもりはみやこ鳥などをしふべくもあらぬしづのめなりけり。藤崎山はすべて小松原にて若みどりの色なつかしうおひなみたり。

末どほき小松がはらに契り置て木高かる世にまたもわけこん。

此藤さきはそのかみ砂山にてふもどはうばらからたち生茂れるあら野なりつるを、藤崎藤藏といへるをのこ山には松を植ゑ野には新墾して田とはなしぬ。藤藏が遠つ祖は志田修理

とて東禪寺の城を守しつはものなり、さるものゝはつ子喬なればこそかゝるいさをあらはしつることもことわりなれど、おほち東月大人文に作り給ひ、鳥嶽の翁かき給ひしをゑりたる石碑ありと聞つれば、いたうゆかしうおもふ物から、さることいひ出んもつゝまじさにたゞに打過くるぞねんなきわざなりかし。しげき林をわけつゝ行に蟬のくるしげに鳴をきけば、いとゞあつさもしのびがたくてしばしとて草のむしろにやすらふ。水をどこへぞいづみもなし、人々皆こうじあへるに、供なるめのかゝる折にこそとて今朝なんもどめでもたらしつるをいざとて、さゝやかなるゑ袋に桃の實いれたるをどう出たるは、かの唐土の梅の林にも立まさりて、こや仙人のそのゝうちなるのにこそあれ、なごいひはやすにぞ、

玉ばこの道のつかれも三千とせのものゝゆゑにこそ今はわするれ。

たゞあつさにのみ説てこゝかしこにやすらひぬれば、日もいたくかたむきぬるころ吹浦にいたる。板びさしならねど關屋は所せければとて、となりなる家にてあるじまうけすこの家の後に出つばてふ泉の侍り見給はずや、とあるじのめ妻のしるべするにぞ、行て見るにげ

に壺のごとなる岩の中よりわき出て前なる川にながれおつ。みな立よりてむすぶに、いみじう清し。あはれけふの山路にあらましかばといひしらう。兩所といふ山もほごちかけれど日も暮ぬべしといへど、ひとくゝまたゆかしがりて行。石のみ坂をのぼりて左のかたに御手洗有り、ふりたる松枝さしおほひて晝さへくらかるべきさまなり。石のどうろいくつもあるにみあかし參らせつれば、けさやかに見渡されて、木立かうくゝ敷生しげり萬ものふりたるさまいひしらすたうとし。大物忌の大神と月山のおほん神とをうつし齋ひまつれば兩所といふさぞ。御社のうしろの岩のくぼみにわきいづるともなく水のたまれるが、六月の照りつゞくにも潤るゝことなく、いかに雨降るともますことみなしなど語る、いとくしきことになん。

廿七日。關守も女鹿よりあなたは委しからねばとて、こゝのあるじ女子かの子をさへぐしてみちしるべとはなれり。うと坂とてさのみ高からぬをのぼりゆくに萩の初花いとをかしう咲たるを、尾上の鹿もなごいふもあり。見おろせば海原はるゝとなぎ渡り、沖邊には白帆あまた見ゆるに、つり舟ごものこぎいづるもをかし。わかれの鳥はいとくろうさやかに見ゆ

るに、また薄墨してかきたるやうなるはをがの嶋成りぞぞ。

吹浦や八重のしほざり打ちはれてわかれの嶋飛鳥ナリにふねかよふ見ゆ。

湯の田といふ所は磯邊に家二つ三つ有りうらかせに浪しろうよせ來る音さへ袂にかよひて
すゞし。萬づいひしらぬさまなるにも、

しら浪の立かへり訪とふ身ならねばうらのながめもいとゞ飽ぬか。

とぞいはるゝ。鳥ざき瀧の浦などすぎてふとかへり見するに、雲かとおもふばかりかすか
に山の見ゆるはいづくぞと、へば、あれなん加茂山にてすこし高きはあつみ嶽なりとこた
ふるに、我やごよりは手にもとるごとなるをいとほるかにも來つる哉、母君のけふやいか
にごおもひおこし給ふらむよとおもふに、すゞろに涙ぐまれて、

ふるさをはるけき空と詠ればこゝら日もへしこゝちこそすれ。

めがの關打こえてみさきにかゝれば、やゝ足おくばかりなるほそき山路をすこしのぼるに、
誓願石とて丈は六尺ばかりもや有らん、つた蔓はひまつはりたるあり。昔宿世山に手が
あしながてふ鬼すみて旅人をわづらはし、時鳥おり居てことなくこえぬべき時はうやと

き、また命とられぬべき折は無やとなきてしらせけるとぞ、そのからすのねぐら成つると
やゝの森はかしこに侍りなどをしふ。さほかの關は此渡にするつらんいづこそ昔の跡な
らましと、へば、さだかにもこたへず。そのかみ祖父君の「しをりせし昔のあとを」とよ
ませ給ふなどおもひ出でて、

たづねつる人もむかしに成はてゝ名ごりだになしもやゝの關。

とりあつめ哀もよほされぬ。こゝなむ安部宗任の石の柵といひつたへ侍るといふに、打あ
ふげば、げに岩垣ことさらにたゞみあげたらんやうにそびえて、一夫當^ハ關^ニ萬騎もひら
き難からんとおぼゆ。されど衣のたてのほころびと共に打やぶられしにこそ、險もまたた
のみがたくおぼゆれ。かくておそろしげなる岩ほに姫ゆりらうたげに咲るもにげなう、さ
る世のためしとすくせをしげなり。のぼり行ほど猶さかしう、石は駒のひづめにみがかれ
て鏡のおもてのやうなるが日に照り添てまばゆう、ようせずばまろびもおつべく手づか杖
をのみたのもし人にてすがり行、名におふ駒なかせはこととさしう、先なるはあとなる
人のかしらふむやうなればげにことわりぞかし。あせもぬぐひあへずのぼるに、すこした



ひらかなるに出ぬればしばしとていこふ。水もがなごもとむれば、こゝに地ごく谷とていとよき泉の侍りといふにぞ、ゆゝしき名をいとはで丈なる艸道わけつゝいそぐ、

よみにのみありとさしをおぼつかな現身ながら今日は來にけり。

岩よりわき出るをあくまでくむに、やをらいける心ちはしけり。

こえ詫る人もすくひつ今よりはほどけの谷と名をばかへてよ。

わけかへるに、小がやすゝきさへ生まじりて、今ぞいぶせさもおほえぬる。大師の御だう

にいたれば、ふりたる木立しげりあひつゝ日影もゝらねば、いとすゞしとて、人々こけの

むしろになみ居て、ひさご取どうづるも有り。折ふし時鳥の木ぶかくきこえければ、

はつ音をばたれかきゝけん秋ちかくみ山隠れになくほどゝぎす。

夏山のこのした蔭はげに立うき物から、行さきも遠ければとて出づ。猶海原見さけつゝ行

に山のすそ海につゞきて見ゆるあなたに、ちひさく森のやうにみゆるは心ざし給ふ象潟の

古跡なりとおよびさしゝめす。小佐川より道はたひらかになりたれど真砂踏にてみなあゆ

みこうじぬ。福田といふ所に至れば、かたへの山は皆へぎ石にて鉦もてこさらにつづ

りてかくつみかさねつゝ山とはなしけむとめなれずおもしろし。ふりたる松のもとにさゝやかなるくわんせ音の御だうあり。岩がねよりながれいづる泉のまづめとまりて、
たちよりて結ぶいづみもあかなくに涼しさそふる松のしたかせ。

とばかり。行に岩のほとりに桶やうのもの三つ四つたゞよへり、人も居らぬにあやしう思へるに、かたちは見えす手のみいだしてかのをけに礫めく物打いるゝを、猶いぶかしうてとへば、かきといふ貝をとるなりといふ。黒髪ふり亂したるかしらもたげて浮みいづるもくるしげなり。高きいやしき品につけてわたりぐるしき世にはあれど、まして

そこひなき千尋の海にかづきしてうきめを刈るはあまにざりける。

とおほえぬ。大佐川打過ぎ貝濱といふをたごるに、日もかたふきぬれど、

家づとにいざひろはましかひはまや打よるなみに袖はぬるとも。

あまのしほや所々にあるもめづらしう見ゆ。夕日にかぎろひて沖行舟のまほにも見えぬはいとゞあかぬながめなりけり。川袋といふ所の橋うち渡りたそがれの頃鹽こしの驛にやどりぬ。

廿八日。かの五條わたりならねど、ごほくとうすのおとするにめさめぬ。道しるべ人出
 来て、空もいとよく晴ぬ、きのふにもましてあつからんに、山路眞砂路にこうじ給ふべけ
 れば、舟路をやるべし奉む、日たけぬまにとく、といそがすにぞ、やがて立出ぬ。橋うち
 わたりてや、野道を行に蚌滿寺てふ寺にいたれり。木立岩のたゝすまひなどのゆるよし有
 ておぼゆるに、庭の面は垣のへだてもなう千町の田うゑつゞけてめもおよばぬまでなり。
 いで、きさかたはいづらぞ、この庭より一目に見渡すところきゝしかとへば、しるべ
 人ほゝゑみて、この青田こそは八十八かたにて小だかきに松生たる所は九十九島になん侍
 れ、文化はじめの年のなるに、しまのみつれなく残りて、水はなごりなうあせはてぬるに
 ぞかくかはり侍り、寛政の頃ほひまでは、こゝより舟こぎ出てしまゝ見めぐらひ、ある
 は影うつす宿世の山の緑のなみに浮べるを詠じ、あるはくまなき月にきようじて明石も須
 磨もよそならぬ、にはの海のおもひをつらねしとぞ、さればゑん位上人も「たゞきさかたの
 秋の夕暮ごはよみ給ひしなり、またゆびさしてこのすのこの下より蟹のむれるしゆるか
 にみつ寺と昔はかきしとなんなどつばらに語る。されどおのれきゝつたへたるは、そのか

み氣長足姫尊みけながたりしひめのみみこの汐干汐滿の珠を納め給へるより干滿寺てふ名はおふせたりと、いづれか
 まことならまし。そはとまれ、かくあれのみまさるさまを見るに、すゞろにあはれにおぼ
 えて涙をさへもよほされぬ。桑田變じてなご、をこごちはすしあへり。哥櫻、腰かけ岩
 など見めぐるに、かたへのつき山だつ所に石ぶみ有るを見れば、

きさかたの雨や西施がねむのはな。はせを　とゑりたり。猶昔しぬばしくていな葉の露
 袖にかけつゝ、ちかき小じまにのぼりて見渡せば、いとゞいひしらぬ詠にあはれもまさり
 て、しばし松がねにやすらひつゝよめる、

とぶ鳥のあすかの川も、ふちは瀬にかはるとふなれ、みづ海の名にながれ來し、象かた
 は、くにつみ神の、あらぶりに、昔に有らず、成にきと、きける物から、いかでその、
 おもかけをだに、みまほしみ、旅の衣の、はるばると、立出來つゝ、駒なづむ、みさき
 の山の、岩根ふみ、こゝしき道も、ひく杖に、すがりてこえつ、目をさふる、木立だに
 なき、長はまの、くるしき道も、すが笠を、蔭ごたのみて、ごにかくに、きつゝを見れば、
 海なしゝ、水はいづらぞ、かぎりなき、小田のいな葉に、露おきて、風吹そよぎ、こぎわ

たる、舟はいづらぞ、あげまきが、み草かりつみ、駒ひきて、行かふ見れば、おもほえず、袖ぞしをれぬ、うちむかふ、すくせの山に、影うつす、昔を忍び、遠近に、残る小じまの、松風に、ありし世をさひ、千萬づに、かくてもあかぬ、象潟を、もどつすがたに、しら波の、立かへしつゝ、見るよしもがな。

きさかたや、いな葉そよぎて、吹風に、なみうちよせし、おもかげの見ゆ。

猶あかぬものから、日もたけぬとくといへば、みな立出ぬるに、をさなき法師のことさらにいで来て、かしこなる石ぶみをも御らんじなのこし給ひそ、と手をさしをしふるぞ、げにももの好みなるごちとや思ひけんぞ、かたはらいたうおもへど、猶ゆかしくて木ぶかき山道や、わけ行に、さゝやかなるほこらありて其かたへにぞ石ぶみ立てる、文字あまたえりたるを人々よりてよむをかたへにてきけば、あめにますとよ岡姫をいはひまつれるとぞ、寛政八年秋田の侍従吾妻のはかせにえらばせてたてつとあり。こがねの峯の西谷なる石ぶみよりは一尺ばかり高くて上に龍の形ふたつぞゑりける、こはかけまくもかしこき天照み神にして蠶がひの遠つおやにしいまぞかりければ、をみなはこことにあふぐべき御神なりけり

とやがて、

ひくまゆのどほつみかみのをしへより、末の世長く傳ふこのわざ。

おりつゝ來ればほどなくさきに渡りしはし邊に至りぬ。此川も、とは大ぶね入りしみなどなりしとかや。依かたぬしかの寺に扇わすれていとあつきにとてつぶやき給ふに、供なるをうなのひらひ來ぬればかへさすとて其あふぎにかはりて、

白露もまだおかなくにいかなればわが身にのみやあきの來ぬらん。

かの鹽屋あるわたりより舟に乗ぬ。しほ木あまたつみぬればいと所せけれど、ひろき沖邊またこなたの岩のたゝすまひ浦わのさまなどのごかに見つゝ行に、かせあらく吹來り浪たかう立て、舟は打あげられまたさかしまに落るやうなるに、うつし心もうせてふしゝづみぬ。その後はしらす只夢のやうにてすぐ。瀧の浦といふ所にて舟よりのぼれど、猶舟ごゝろのなやましなければ、海士のとま屋にしばしいこひて出づ。湯の田といふ所にいで湯あるを見んとて立よれば、井のやうにつゝ井筒するたるよりわきいづるなりけり。家は大きやかなれど唯三つのみあり。また荒崎のかまといふは吹浦の名所に侍れば見せ參らせむとて

しるべするまに／＼、ほそき艸道わけつゝ行ば、うしろはなべて岩山にて廣からぬ濱なりけり。岩のはざまより泉ながれいづるを釜といふとぞ、潮とあはひ三尺ばかりへだて、かく清き水のいづるぞあやしき、はたえもいはれずをかしき形の岩ごものこゝかしこにあるを、こもまた四十八かたのながめともいはまし、と猶見渡すに沖はいとよく晴わたり、風吹まに／＼白う浪の花咲て、釣舟ごもの見えつかくれつこぎゆくさまなど「常にもがもなごすしぬめり。此の後の山なんいとさかしく侍れど、二の瀧詣のあしならはしにのぼりたまへといふにぞ、こゝしき岩のかけ路をつたひのぼるに、過こし駒なかせもおよぶまじうさかしかりけり。松柏おひ茂りたる中に岩むろあり、ゑれるともなくおのづから不動のみすがたあらはれさせ給へば、岩屋ふどうとたゝへまつるなどいふに氣恐しきやうにてちかうもえよらず。開禪寺の山めぐりて、日のいりつかたまた吹浦に歸りぬ。

廿九日。空のさまも雨もよひなり、すさにも病む者もあればとて今日ほどゞまりぬ。己の時ばかりより降出てをやみなければ、をこごちはをのゝ柄もくたすてふわざに心をいれて居れど、こゝにはまぎらはすべきわざしなれば、刀自双紙もがなともとめ給ふに、依

かたぬしきは是をとて出し給ふを見れば、例の唐哥なり、きのふ舟路にて見し大師ざきわたりのはほのさまこそこゝらの詠めにまさりて妙なりしを、一目だに見ず過つるを岩ほのいたく恨たる心を作りておのれらを笑ふにぞ有ける、こは昨日の扇のさがなきものいひやにくかりけん、やがて其かへしにとて、

しほ風は、吹かよへども、日をさふる、木立しもなく、しら浪は、打よすれども、結ぶべき、清水もあらぬ、真砂路を、あつさに詫て、心のみ、いそぐとすれど、皆人の、たごりかねつゝ、今はたゞ、せんすべもなく、鹽木つむ、海人の小ぶねに、からくして、乗つゝくれば、和田つみの、こゝろをあらみ、なみ風に、打ゆらるれど、ますら雄は、さほき沖路に、むらきもの、心をほるけ、たゝみなす、きしの岩ほに、玉なせる、こと葉そへて、終日に、見つゝきぬとふ、たをやめの、身はかひなしや、夏草の、しなへしごとく、舟ぬちに、なびきこいふし、展轉ぬば玉の、夢に過ぎ來ぬ、見ざりしと、うらむ岩より、見ざりつる、われは我身の、うらめしきかな。

たまくしげ、ふたゝび通ふ、浦ならば、みるめなしとも、詫ざらましを。

日暮ぬれば、かはらけとう出て人々くみかはす。此家に三よさやどりぬれば、女子らもかたらひなれて、かたみに名ごりをしむやうなり。

廿日。けふも猶はれねばいまひと日などあるじのどむるものから、

うらなみにしほだれはてし旅ごろも何今さらにあめをいとほむ。

といそがるゝに、ひとくもおなじ心にやしひて出たつ。ほそき山路をわけのぼるに、左の方に森池といふ有り、爰にて雨は、れぬれど、

風ふけばこすゑのしづく落添ひていとどますますらんもりいけの水。

また蓑わといふ村をすぐとて、

雨はれていまぬぎすてし旅人はみのわてふ名をきくもうれたし。

行々て落伏村なる永泉寺にいたる。山門うち過ればほそきなかれ有てはしうち渡したるあなたに、こ高からねどふりたる松二もどあり、鶴龜と名づけしとぞ、一もとは萬代こめて植つるにや、いりもて見れば、まばゆきまでみがきなしつ、佛の御前さらくしうかどやき渡りていとたうとし。後ろの山なる七ふしぎてふ所々を見むとて、かしらしろきしもべ

のはうきもていたるをしるべに立つ、わけ登るに、日は照りつれど枝さしかはす松柏に影だにもらねば苔路いとなめらかなり。座禪石とて丈は六尺ばかり廣さはむしろ一ひらばかりにてしりへ高なるあり。又自然石の地藏尊苔衣きてたせ給へり、

とはどやな露のみかゝるみ山路に幾代かさねしこけのころもぞ。

血の池とてこどくしうさしめすを見ればくぼまりたる岩に雨のなごりにや水すこしたまれるなりけり。よちつゝ行に、上の平らかなる岩あり、こは慈覺大師のごまのだんといひ侍り、そのかみ宿世山に手ながあしながてふ鬼すみてひとのわづらひ大かたならぬを、大師のあはれみ給ひてこゝにて降魔の法しゆし給ひしに、さばかりたけきも二またと成て尾は此山に落て、村雲ならねどいみじき劍の有しによりて、尾落伏劍龍山といひ侍ると、はかせめきてときゝかす、うけ難き事におぼゆ。胎内くゞり、鬼のかけはし、なごくしき所々をめぐり、あなたこなたよりそびへ立たる岩ほに板ばしかけたるを打渡るに、下にはおろちの伏したるやうなる岩あり、蛇躰石てふとぞ、げにむしたる苔もうろこかど見ゆ、寺にもかうくの寶あるなどいへど耳とまるもなければ出ぬ。下戸升川打過て、未の頃は

ひに野澤なる齋藤何がしがもとにいたりぬ。此わたり近きより書をよう、つす法師の來て山水花鳥などかきすさぶを人々きようじて見はやす。

文月一日。けふはすくせ山なる二の瀧のさかしきにのぼればとてつとめて出立つ。秋と成りしもしるく霧ふかくたちこめて、くだかけの聲そらにきこゆるなど、山里のあさけいどあはれなり、や、日はさしいで、山の梢どもの霧のまがひにそこはかとなう見渡され、しげう置わたしたる千艸の露の玉とかゞやくもをかし。

秋とおもふこゝろづからやけさはまたわきて露けき野邊の道しば。

ひだりの方に青葉をぐらうしげりあひたる森山有て、水の音さや／＼となりてものすさまじうきこゆ。とへば名さへおそろしき瀧澤とぞ。立つゞきたる松のしげみをわけ行に吉出といふ里にいでぬ。野澤なるあるじもともなひきぬるが、こゝにおほやけの仰ごにて瓦やく屋のさむらふが、四方のなかめいとよく侍ればしばしたちよらせ給はずやとあないするにぞ、うち見ればいかめしう立たる門有り、いりぬるに、廣らかなる庭に竈いくつともなくすゑならべあるを、めなれずめづらしうおぼえてちかくより見る。またながき屋の

内にも外にもむな瓦あまたつみて有り、かなたに數奇屋の侍るが、いらせ給ひて茶めし給へといへば、打まはりて行に、さゝやかなるふた間いと清らに作りなし、庭はさゝやかなる竹垣ゆひまはして木は一もとも植ゑず、みどりのしば草一おもてなるに飛石のみぞつたるはやうかはりてをかし、萬づ心をこめたるさまにあるじゆかしうおぼゆ、やがていでつる見れば、六十計の翁なり、この人三十とせこなたにみやこより移ろひ來しとぞ、むべこそかゝるいなかには似げなうぞありける、調度くだものなべてひなゝらず、外もまを見ればすくせの山は手にごるやうにて、すぎこし松原もさながら庭かど見ゆ、さればこそ庭の木をば植ぬ成るべけれ。近きわたりに蠶莊とておほやけのはた織所あるに、關守のしたしき友のすめるを、たきのしるべにとてせうそこしてまねぐ。野澤人はあの高根のなかばにのぼりてあしをらうすとも此瀧の水にはまさらじとてひさごとうで、爰にとゞまりぬ。艸道ふみわけつゝ行ば、三新田といふ所にかゝれり、しるべ人かしらめぐらして、こゝなむ寛政の頃ほひまでは小がやおひしげりたる野らなりしを、白井何がし學の館の御れうにとて、かく千町田の小田とはなし給へり、など我を其うま子どもしらで語るを、よそのことがほ

にきつゝも心の内には、

かぎりなき君がいさを、あふぐらん小田のたみ草かれぬ限りは。

並木の松左右に植わたして、おくに社見ゆるをさして、こはこの里人らが白井大明神とさへあがめいはへるなり、ごをしふるにぞ、かくゆくりなく來ぬることの嬉しうもほいあることにおもふものから、ひとくの中におのれのみをがみまつらばしるべ人やあやしまん、またたゞに過なむもこゝろぐるしうかつはかしこし、ごに角に隠れ笠きたる身こそわびしけれど、ひもをのみときしに、刀自心をやとり給ひけん、いざまうでんと手を取給ふが限なく嬉し、されごたいまつるべきぬさはさらなり、山はまだ青葉なれば、まに／＼ごまをさむやうもなく、

何をかもぬさにしてまし秋を浅み折りてたむけん紅葉だになし。

といへば刀自、

おもはずよみ靈のふゆを祭りてし神のあと、ふちぎりありとは。

後はふかき林にてかたへに清らなる水ほそうながる、二たびまうづることあらじなごお

もふにすゞろ涙ぐまれて、

かしこくもいと昔をしのぶ身は神の宮居をたちぞわづらふ。

いづればひとく待やすらひ居たり。そも／＼唐土にては蒼生を恵める政ある人は生いけるながらまつれるを生祠といへることはきつたへたれど、大御國にてはそのため生まれなるにて、編者云ふ、今の各學校に御眞影を齎す奉安庫や其れなり、ちかきとし頃紀國なる駒根木正次とかやらむ、素より、天皇は現津御神又現人神に座坐せば然り。いへる武士かしこき名ありてたみ草その誠になびき、在し世ながら駒根木の社と名づけてまつれるとぞ、この社もおなじきさまどこをおぼゆれ、いまはかゝる御いさを、もしらぬ顔なる人もおほきはいとくちをしうなむ、百とせにして天下のあげつらひはさだまること古の人もいひしなれば、後の世には猶光りいやまし給ふらめなど文きぬし語居給ふ。編者云、實其時の言の如く百四十年後の昭和三年十一月十日御大典に贈正五位の恩命に浴す。行きゆきて山路になれば草のみしげく木立もなし、あつきたふべうもなければ只のぼりにのぼるに、すさごもはこうじはて、見給はん瀧よりもおのれらがあせこそ落まさらめなどつぶやき詫るもことわりにおぼえて心ぐるし。鳥居立る所にてしばしいこふ、見おろせば緑の小田はてもなうて遠近の村里はたゞ森のやうに見え、

青海原はそらにつゞきそれかあらぬかこの葉のうかべるやうにふねごもちひさく見ゆるなご、すべて色なき筆にはかきつくすべうもあらず、日はいとよく照りそふものから、吹くる風のすゞしきにみな立かねつ、其鳥居におほく書すさびたる發句ごものの中に、「八日めや鳥のさへづる青葉かな」とあるをあなこゝろもえぬことこの葉やかたはらいたしと人々笑ふ、されどこの道しれらん人の見ばいみじきことこの葉にもやあらむ。爰よりは平にてくさ果なうおひたる中に、大きな石所々にあり、下野の那須野といふもかくやなどおぼゆ。やゝわけ行に木立いとふかく成てほそき道の露さへしげきはいぶせければ、

ことさらにぬれてを行かんけふならで又わけがたきみ山路の露。

かゝる山路にあれば行かふ人もあらで、唯柚人のこりすてしつま木のみこゝかしこに有、たつきもしらぬなどいふによぶこ鳥にはあらで鶯のわかびたる聲にさへづる霞をわくる初音より猶めづらしうて、

うぐひすの聲するかたにわけいらむ風にしられぬ花もありやと。

のほりおりつゝ猶わくるに一の瀧音のみさやかにきこゆ。二の瀧もほごなしといへば嬉し

うてすゝむに、いとさかしきおり坂にてふりたる杉くらきまでおひてことにもものすごう、細き岩路の苔なめらかにあしふみ立べきかごもなし、鳥もかよはぬとはかゝる所をやとおぼえて、くだるべうもあらねばあしさへわなゝかれぬ、さばかりたのもし人なりつる杖もつくべきやうなければ、つたかつらにすがりてからうじてくだりぬ、瀧のすそ川水瀬早う岩にせかれてながれ行、そのしげき岩かごふみこえつゝ瀧のさまを見るに、廿丈ばかりのいは山より幅は二丈ばかり二俣にわかれて唯白う雪のなだるゝが如くにおつ。音はもゝのなる神落かゝるやうにかたへの人の物いふだにきこえず、峨々たるいはほのたゝすまひ、かみさびたる木立のさま、なべて此世の境とおぼえず、口ふたがりて唯まもりにまもる、水霧いたく立つを見て、脚下忽チ成ス雲ヲなど例の唐哥うたふにぞ、げに瀧のさまは中々ことこの葉にのばゆべくもあらねごみづからも

みだれおつるたきつせに立つみ烟はすくせの山の雲となるらむ。

打見るまゝに心さへいとすゞしう成て、仙人なごぞかゝるあたりには行かひあそぶらんとおもはる。山路にて暮なばびんなからましとて、かのつた道からうじてよちつゝのぼる、瀧

のおと猶おどろくしうきこゆるに、かへり見すれどひまなき木立に見ゆべうもあらず。いそぎつるほどに申のなかばどかりに隠流といふ里に來ぬ、こゝなんしるべ人のあづかれる蘆莊のはたおり屋なりける、こゝはもはらこがひ、糸ひき、きぬおるためにとて公よりまうけさせたまふ舎にして、しそこなる重勝ぬしのまけか任蒙ふれる所なればいりつゝ見るに、筋おり、菱きぬはさらなり、五つの色いともて花鳥のさま妙なる錦をさへおりわたるはあやにめづらし、またかたへなるより屋といふには緒ぐるまのおとどろおどろしきまで人つどひ居て糸より居たり、竹のさをかけ渡して、緑、くちなし、紫などいろくりに染かけたるもあり。えんにみな腰打かけて見出せば、水はかれて形ばかり成る池の中島にや、こ高き松のみどり色ふかう見ゆるもあはれにて、

うゑて見し人もなき世におのれのみ木高きかげとたち榮えつゝ。

人々も打まもりて昔しのびがほなり。あるじたづくり酒罍どう出て、山里のならひみさかなはなけれど、とてひとくくりにすゝむ、刀自おのれにもかはらけさし給へばいさゝかうくるに、かの唐土の岡をこえざるにはあらで、

手もゆらにはたおる里にくみつるはこや上つ世のあまのうす酒。白上代には白にて酒つくりしなりとぞおぼえし。平津、鹿の澤など過て日暮ぬれば、松ふり照らしてたどり行もいにしへめきてきようある心ちす。こよひわらび岡なる坊にぞやどれる。

二日。あさ戸ひきあくれば、軒のつまより雲立こめて雨さへ降すさび山里のあはれもこよなうまさりぬ。關守はこゝよりかへらんとてわかれをつぐるに、人々名ごりの唐、大和よみいでしにぞみづからも、

ふる雨に山路をわくるそでよりもひとりかへらん人をしぞ思ふ。

またこのほどのしるべの勞をねぎらひて、

山もひくゝ海もあさくやしるべせし君がこゝろを何にたどへん。

とかくしつゝ雨もはれぬれば出立ぬ。音にきゝつる大泉ばうとやらんの前裁も見ばやとて行、こゝら立つどきたる中には家もむね宗々し、ついちの小門よりいれば庭もなべてならず作りなしたるが垣の外面を見出すに左右におひ並たる松原雨の名残にいとどとき葉の色まして、敷妙の袖の浦わはたゞこゝもこのやうなれど、はれ残る雲に海のおもてさだかに

見えぬもをかし、かくたへなるながめをあさ夕に見つゝ居ればぞ、こゝのあるじのみやび心もいとすむらめどうらやむ人もあり。くわん世音にまうづ、二王門をすぐれば石のとうろいくつもあり、中に由利郡本庄の領主藤原まさ武とゑりたるぞことに大きなりける。御堂いとひろらにみがきなしたるさま心もおよばず。けふはしるべ人もかへりつおのれぞあない者なれとて依かたぬしききにすゝみ給ふ。何がしの坊のうしろの山にいでゝ右の道よりゆけば、いと茂き林あり、わけわづらひて、さはこのうへにいでゝぞ道はあらめと、しもとほらおしわけつゝのぼるに衣はしぼるばかりにそほぢぬるにぞ、

しるべせし人のこゝろは浅けれごまごへる道のつゆはふかしな。

なごうち詫つゝからうじて道に出ぬ。空は名ごりなう晴て日はてりまされるに、木立もなき砂山のぼり行あつさたへがたうおぼえて、しばしいこひて見おろせば、えもいはれぬけしきのをかしきに、白うぬのひきはへたるやうに河の見ゆるぞ、ちかくばくまゝほしうぞおもふ。折しも焚木おへる翁のかたちきたげなるが、のぼり來つゝあせおしぬぐひ君らはいづこよりぞ瀧まうでにやと問ふに、さなり秋田より來つと文きぬしたはれあざむけば、

おごろきたるさましてあなはるくゝと來給ひぬる哉、鶴が岡をもかゝり給ひけん、城下のさまはいかゞ見給ひ、とほこり顔にいへるにぞ、忍びがたくてうつむきて笑ふ、また行先の道をとふに、かの川あるあなたの里は新出と申侍り、こなたの黒川、草津など過てほごなくます田村に侍り、此山は綱とりと申侍りなごまめだちてをしふ。きゝつる里々打過て行に、ながれいとはやうめもきるやうなる川に、まろ木掛わたし、ま遠に紫おきならべたる橋ありようせずばあしふみおとすべくおぼゆれごからうじて打渡り、青柳うゑなみたる川つらに添て行に、しげき岩ほにせかれくる水のさまいとおもしろう、風はさらなり、浪の音さへすとしくて、むつ田の河ならでも立とまらまほしうぞおぼゆる、山路になれば、きのふのごとはさかしからねごかしこゝにてふみまごひなごしつればにや、かの翁にきゝしより行にとほさのます田かな、とたはれてしばしやすらふ、梢に蟬ごものなきあへるに、

たづね行瀧のひゞきとおもふまで高きこすゑにせみぞなくなる。

のぼりつおりつやゝます田村にいたりぬ。ふと見ればしげきみごりの木末こぬれよりたきの白

う見ゆるにぞ、おぼえずみないそぐ、柴橋だになき小川をかち渡りして、かたへは山かたへは田にていとほそき道をゆくに鳥居あり、そこより松柏をぐらきまで生茂りたるをすぎ、瀧のもとに立よりうちあふぐに、千尋の岩峯より空につゞきて落くるさま見るにまづ心おどろかれて、

雲居より落來るたきの水かみはそらにながるゝあまの川かも。

うへはぬき亂りたるしら玉の千々の袖にもつゝみあまりつべう、中はまたしら雲吹おろすらむやう成が、下の岩ほにかゝりて糸とみだるゝさますべてたどうべきものなし、まいて音のおどろく敷は何にかはたとへむ、水霧いみじう立てあはひほどあれど衣はたゞしほるばかりに成ぬ、風吹まにく瀧のすがたさまくになびきかはるなごたゞ打まもるのみ口つくまりて人々みなことの葉もなし、高さは九十三尋ありとぞ、あはれ二なきゑのたぐみにうつさせて見ぬ人のために、などおもふも猶筆およぶまじうや、傳へきく廬山の瀧のさまにもをさをさおとるまじうぞ思はるゝ、飛流直下三千尺とか作れる唐歌のさまにさながら似たり、この瀧をしも都ちかきにあらせましかば、布引、龍門のたきとひとしく歌枕

どもならましものを、あまさかるひなのほとりに埋るゝぞくちをしきなごいひて、いかでことの葉なくてはとゝじのせめたまへば、

瀧つせは、あやしきものか、時ならで、あわに降たる、白雪の、くづれ來るかも、岩ほうつ、浪のひゞきは、なる神の、とどろくがごと、ふく風に、なびくすがたは、み谷より、のぼる瀧かど、おどろきて、猶しあふげば、ぬしゝらぬ、布ぞさらせる、こき亂る、玉もちり來ぬ、山つみの、なせるわざかも、天なるや、おとたなばたの、かざしかも、思ひまごひて、たゞふべき、ことの葉をなみ、とにかくに、いふすべしらに、家びとの、いかにとゞはゞ、あかざりき、あかずとのみや、たゞにこたへむ。
やま川のへだてざりせばしとに來て見るべき物をこれの瀧つせを。

時うつるまで見れど猶あく世なき心ちして、一飛泉みつゝわれはかへらしと、花山の僧正のごといはまほしけれど、日も暮ぬべしとすさのもよほせば、何がしの矛もたぬ身にしあれば、すべなくてつれ立ぬ。この宮の別當のもとに、唐大和のこの葉もて瀧をたゞへし歌どもあまた有とさゝつればひとくゆかしがりて立よりてこふ。やがて出しつるをかた

へより見るに、めどゞまるもなき中に、

瀧のもとにたちより見れば時ならで峯ゆなだる、雪かどぞ思。

固

瀧つ瀬のなかば、雲に隠るひてそのみなかみの限しられず。

魯道

これのみぞ人々めづる。夕日さすものから、山路いどすゞしうなりて、日暮しの鳴などはれなり。藤ばかまのなつかしげに咲たるを、かゝるみ山にはぬきかけしぬしもあらじなごいひて、

手折るとも誰とがむべき藤ばかまあかぬ心にいざまかせてむ。

とて折つゝ行。新出の里すぎて市條といふにやどりもどめんとていそぐに、日は暮はてぬ。松もがなともむれど里はなれぬればびんなくてほそき野道をたどり行に、ひるはさばかりまたれつる風も、嬉しとおもへる水の音もいみじうすさまじき心地して、

山河の音はひるにもかはらじをなど身にしみてわびしかるらん。

草村のむし聲みだれてなきかふに、ほたる三つよつ光かすかに田の面とびちがふもあはれなり、「秋風ふくとなどいひつゝたざるに、近き森にふくろうのからびたる聲きこゆるぞま

いてすごう心ほそき、とかくしつゝやゝ心ざす里にたどり着ぬ。さりぬべき家々にてはみなしづまりぬればすべなうてあや敷家にやどりをもとむ。いと所せきが、かべなど所々落て柱もゆがみぬ、こよひぞ草の枕といはましなごかたらひをるに、あるじにや有らん五十歳あまりのかたちふつゝかなる男の出来て、ぬかづきつゝおのれは何の誰てふ者にてなごさもことん、しう名對面しこわづくりして頭もたげたるに、目のいみじう光るにぞあやしとよく見れば、眼鏡といふものをかけたるにともし火のかけさしたるなりけり、こゑのむくつけき、目のまろうひかるなど、さながら過つる森の鳥の、身をかへて化こしかとおもへばふきもいだしぬべう成ぬ、ねんじてをるぞいとくるしき、やすみぬれどかけひのおとのさや／＼とまくらがみにひゞきて頓にいもねられぬに、瀧のさまつごめに添ておもかけ身をさらす。

三日。萬いぶせきにわびてみなとくおきいでつゝ庭の面を見出すに、よしありげに植こみたる木立に、うす霧わたりて、岩などもなべてならぬを所々にすゑて、いと清らなるやり水に柴はし打わたせるさま、わざとならず見えて、あるじと家居のつきなきには似げなう

ぞおぼゆる。けふはすくせの山を後にしつゝ行に遙に山々のつらなりみゆる中に、形もをかしたかき山より雲の立まふは只煙かと思ゆるぞ淺まが嶽もかくやなどおぼえて、

しなの路にけふや來にけん打むかふ山の高根にけふりたつ見ゆ。

とへば湯の澤がたけなりとぞ。やゝ行けば石の御坂いと高くて御社あり、いかなる御神にやとゝへば、矢流川廣幡のみやにておはしますといふ、さはとてまうでぬ、神垣の松いととしふり日かげのかつらもおひかゝりぬべし、こゝぞいにしへ戦の場にて右の山は館あとなりとぞ、のぼり見るにたひらかなる山にて千艸所せきまでおひしげりすとむしの聲などあはれにきこえければ、

駒なべしくつわの音にひきかへてふりし世しのぶすとむしの聲。

松風のひゞきもその世のことともしらせがほなり。

神垣のおい木のまつにもものゝふの矢ながれ川のむかしとはゞや。

大石、檜橋てふ所を過て右に黒うもりの見ゆるをとへばあれぞ飛鳥の觀世音なるといふ。こゝをもよそにやはとてまうづ。おとにきゝつる二王のみすがたこそたうとけれ、慈覺大

師の作らせ給ふといひ傳ふ、いといかめしういけるがごとくに見ゆ、御佛にぬかづきつゝやがて見あぐるに、黒き板に白きすみして、たゞ頼めいらかも高くとぶ鳥のあすかのみやのひろき恵を。とあり、繪馬がくやうのものあまた有れごうるさければしるさず。爰よりはとほくもあらずとさきけば、十二瀧をも見むと人々おもひおこしぬ。遠藤河内とて田のみ果なうてさせる見所もなき野道をかぎりなく行て、やゝ瀧ある山にのぼり着ぬ。そびえたる岩山もやうかはりて我國の境とも見えす、武りやうの桃源もかくやあらまし、けふはこゝらの道にふみつかれたるをねんじつゝからうじてのぼりて見れば、あなたこなたの岩山のあはひを十二きだに成りておつるなりけり、されど三きだ四きだならでは見えす、たかきひくきさらしかけたる糸のごとおつるもをかし。岩ほに萩の咲たるを見て、

山姫のかざしの花ごにほふらん鹿もかよはぬみねのあきはぎ。

日もいたうかたぶきぬとてみないそぎつれと幾ほごなくて暮はてぬ。ほそき小田のくろ道たどりゆくにもすればふみおとしていとあしおもうなりてすゝみがたければ
さかしかる山ぶみすればわれさへにあしびきとこそけふは成けれ。

と思ふ。松山まではほど遠しついで松なくてはいかせむごころじぬれど野中にしあればい
とびんなし。とばかりゆけばはるかに火のひかりふたつ三つ見ゆるにぞ、いさゝかたより
得たるこゝちしてそなたへとたざる。行つきて見れば、河邊の里のわらはがつごひ居て、
より來るいを、とらんとて松ふりてらすなりけり、やがて火こひ道とひなごしてすこしあ
ゆめば細き川あり、渡せる橋もなければかちわたりして、あさ瀬しら浪袖さへぬれぬ。ふ
け行まゝに道のつかれもいやまさり詫しさいはんかたなし、あすは家路にかへらむとおも
ふかりそめの旅だにもかう心ばそきを、かりこものみだれたる世には、やむごとなき人もし
たがふ者だになくて行方もしらすさすらひしなごましていかなりけんごあはれなり。から
うじて松山にいたれば夜半ちかく成ぬ。ひとんのあひしれる方もあれど、いたうふけぬ
ればむら^{無禮}いなりとて某の町にやどりもとむ。ねぶたげなる聲しておきいでつゝ來れどみな
いなむにむねつぶれて、

まつ山の名のみたのみてこし物をいまは宿かす人だにもなし。

雨さへ降きぬ。かくては艸のまくらも結びがたしいかゞはせんなごわびあひつゝ猶もどめ

さするに、やゝ有てかへりきてかうくゝの家になむからうじてこひもどめ侍りぬといふに
ぞ、いと嬉しう、黄泉にてほごけに逢へるもかくやあらむなど、供なるをうなごものをが
みなどするもことわりになん。やがていりぬれば物もおぼえずふしぬ。

四日。みの時すぐる頃起いでつるものから、雨降ればにやいとくらし。立いづるほどいよ
ゝふりそふにぞ、

なみにぬれ露わけきぬる旅衣猶くたせとやあめのふるらむ。

銅龍山總光寺にまうづ。いらか高く境内いとひろうちりだになし、いりもて見れば、佛の
御まへきらくしうみやう香薫りわたり、作りなしたる四季の花はいま咲いでたらんやう
なり、らん間にゑりたる龍は空をもかけりつべう、虎は風をもおこしぬべきさまなり、い
かなるたくみがものしたりけんといとくめづる。晝にもちかし雨も降添ひぬれば道のほ
ごもたごくしからんなどささごものいそがすにぞげにもとていでぬ。名にしおふ七色の
櫻をば青葉なりとも見るべかりしをどこゝろ残しつ。およびを折ればさままでの日かずもつ
もらねど月頃へだてし心地して、此頃のおもしろさも、また詫しかりしもとくも母君に語

りまゐらせばやとこゝろのみいそがるるに、小出といふ渡りにいづれば風いみじう吹て笠もどられべうなりしかば、

さらぬだに家路をいそぐ旅人のかさふきかへす風ぞつれなき。

廻楯、八色木など打過て藤島にきぬれば、家路に成ぬる心ちしていと嬉しきものから、かゝるしのびありきはまたいつかはとおもふに、すぎ來しかたもかへり見がちなり。されどちかき山だにさだかならねば、

あま雲よ立なへだてそながめこしかたみにも猶見つゝかへらむ。

渡前にいたれば雨もはれぬ。押口なるわたり打こえからすのねぐらもとむる頃はひ家にかへりぬ。まづ母君に見えまつらむと常のおましをさして行けどおはしまさねば、いづらやいづらともとむるに、何にぞかくおそはるゝよこの給ふ御聲に夢さめつれば、ありつる床にて母君のかたはらにふしたりけり。

藤の舎のあるし 千代梅

此胡蝶日記の假字づかひは新古にかゝはらず専ら源語、狹衣、更級日記など暗記にまかせ筆の進むにしたがひ書たる物なり、そは婦人のすさみなればなり、なまじひに古假字を以て論ずるはなか／＼毛を吹き癢を求る癡人のわざぞかし、其綱を捨て錦をどるこそ能く文を見るの君子とはいふべけれ、今の古假字の事は別に論説ありといへども爰には略之玄齋ふたゝびしるす。

天保庚子仲冬六十六叟

おのれ莊内の國學と云ふ物を物しけるに其國文學は寛政より嘉永頃迄いと盛にて女流の中にもすぐれたるあるが殊に白井千代梅女の胡蝶日記を女學生の科外讀物にせまく欲しく思ひて和田鶴岡高等女學校長に其由語りければそはいとよき事なりと諾ひ給ひてのたまふやう此日記の外に愛女の參宮日記廉女の遅櫻の記等も有り云へば其等一つにして刷本にし廣く世に傳へなば更によけんどのたまふにぞ然あらん事は豫て願へる所なりとて其れ等の日記どもを校訂して校長の許まで遣り置しに學校の方にて刷本にする事直に成難かりしかば池田教諭口惜しとて自ら騰寫刷にせんと其器械をしも備へたれど摺刷の暇なくてありつるを助川ぬしそを聞きて吾史料研究會の事業として物せんとて學校の方に計りけるに事よく整ひて其事と成りければ己れ更に之を校訂編修して上下二卷とし莊内女流文集としも名けて刷卷とする事とはなりぬかれ其故由をふみのしりへにかきつく

昭和六年七月

松園のあるし 星 川 清 民

年六十八

天祐なりしか、こゝに昭和七年五月新緑の親しむべき好時季に於て、年來懸望して止まざるも尙得られざりし郷土史料の出版を擧ぐるを得たるは實に生涯の一大快事と信ず。

昨年初夏、鶴岡高等女學校に和田校長先生を訪ふ、談偶郷土の美玉として以て天下に誇るべき閨秀作家の美文に及ぶ、時に先生の曰く曩に星川翁よりして女流作家の名文集を得以て一讀するに、其名筆一代の美華たるを覺へ是を全校の池田、秋保先生を始めとして同校の諸先生と相謀り廣く是を學生の讀誦に便せん事を計企せり、然しながら多忙なる教職に殉ずる先生の餘技としては實に一大難事なり願くは其便法なからんかと、先生の熱舌は以て鈍感なる吾人をして尙直に雙手を擧げて共鳴協賛せざるを得ざらしめたり。

時は莊内史料寫真帖の第一號の發刊已に終る日なり、直に『女流文集』上卷を發刊せんん事約せり而して印刷の校正は是を星川先生に懇願せる處先生の熱心や夏の炎暑、冬の寒冷も厭はるゝ事なく又其老年も事とせられず再三再四の校合校正は昨年末に至りて殆んど完全なる印刷物となるに至れり。時に奥田印刷所にては新に活字の入所あるを知り是の機を利用せんとして終に遅延一年漸く今日發刊するを得たるなり。

難産なる哉『女流文集』の誕生、吾人素人の身にして尙此叢書の發刊するを得たるは諸先輩知友諸顔の賜にして而かも吾人の過去を回顧するに恰も一場の夢の如きの思ひあり。半生の生存地、自己の舞臺として生活とせるの東京も彼の大震災の爲め一場の灰土と化せるより故郷に潜在の身となりて浪人生活を營む事こゝに十年、而かも一事の遂行なく夢死徒食の一賤民とは化せり、而して其中に幼少よりの先輩矢口親六兄と相計り以て郷土史料の發刊を企て其母体として莊内史談會を發起こゝに年を重ねる事數年未だ其目的を達するを得ざるなり。

然るにこゝに『女流文集』出版を擧ぐるを得たるは要するに年來の大願を達するの一事にして、事こゝに至れるは和田校長先生よりの賜なり然れども若し星川翁の熱心なる校正なくんは如何んぞ今日あるを得んや又無經驗なる吾人を扶助して今日に及べる印刷所奥田文太郎君の勞苦は決して忘るべからざる所なり、已に發刊之辭に同人を代表して潜逸ながら一筆以て吾等の希望を陳述せるもこゝに偶感跋語以て各位の厚意を銘謝す。

昭和七年五月氏神祭典之日

助 川 正 誠 謹 白

昭和七年五月二十日印刷
昭和七年五月廿五日發行

非 賣 品

發行兼 印刷者 山形縣鶴岡町馬場町
奥 田 文 太 郎

發行所 山形縣鶴岡市馬場町
莊内史料研究會出版部

電話 六〇三番
振替仙臺七四九三番

遺詫詫瀧紫詫烏詫詫詫な詫詫ぬあ誤ちか脱
 のつかた漏
 のむしは廉
 る敷山女上

遺佗佗龍柴佗鳥佗佗佗な佗佗れよ正

おそさくららの記 一丁 一行
 粟夢なんごにや、あなき赤きす
 温海の記 十六丁 七行

三三 二二二二 二十七丁 池田氏系圖 十二行
 四十七 三十六 三十九 八 四 三 七 七 六 十六
 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁 丁
 十 十 十一
 六 三 六 五 五 九 四 二 三 六 六 五 一
 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行

胡蝶日記
 温海の記

318
578

終